

内ル呂4
號卷409
17



下告岡

上野のゆゑを描して

小田原北条家の古文書

大谷十郎九助

等

武藏國風土記殘篇曰 豊嶋郡下谷岡貢鹿狠兔狸山鷄脂云

貢薯蕷松脂云

五條天神宮 東巖山の西の麓瀬川氏の祀より祭神少度名年

本朝醫道の祖神也

菅神の像の實永草割の社御連

太保尾眼ありと御社相属

年

一坐 本朝醫道の祖神也

北野天満宮を相殿とす

菅神の像の實永草割の社御連

太保尾眼ありと御社相属

年

五條天神宮 東巖山の西の麓瀬川氏の祀より祭神少度名年

本朝醫道の祖神也

菅神の像の實永草割の社御連

太保尾眼ありと御社相属

年

教師頼川因憶り宅地より遷させらる

菊出涼雲其地の上所

御社の邊ありと

每歲節

年

北國記行云

正月の赤い葉の多いもの出よ優遊して坐の社

五條天神と申そり折り枝の茅原を焼く

年

樂院と申そり折り枝の茅原を焼く

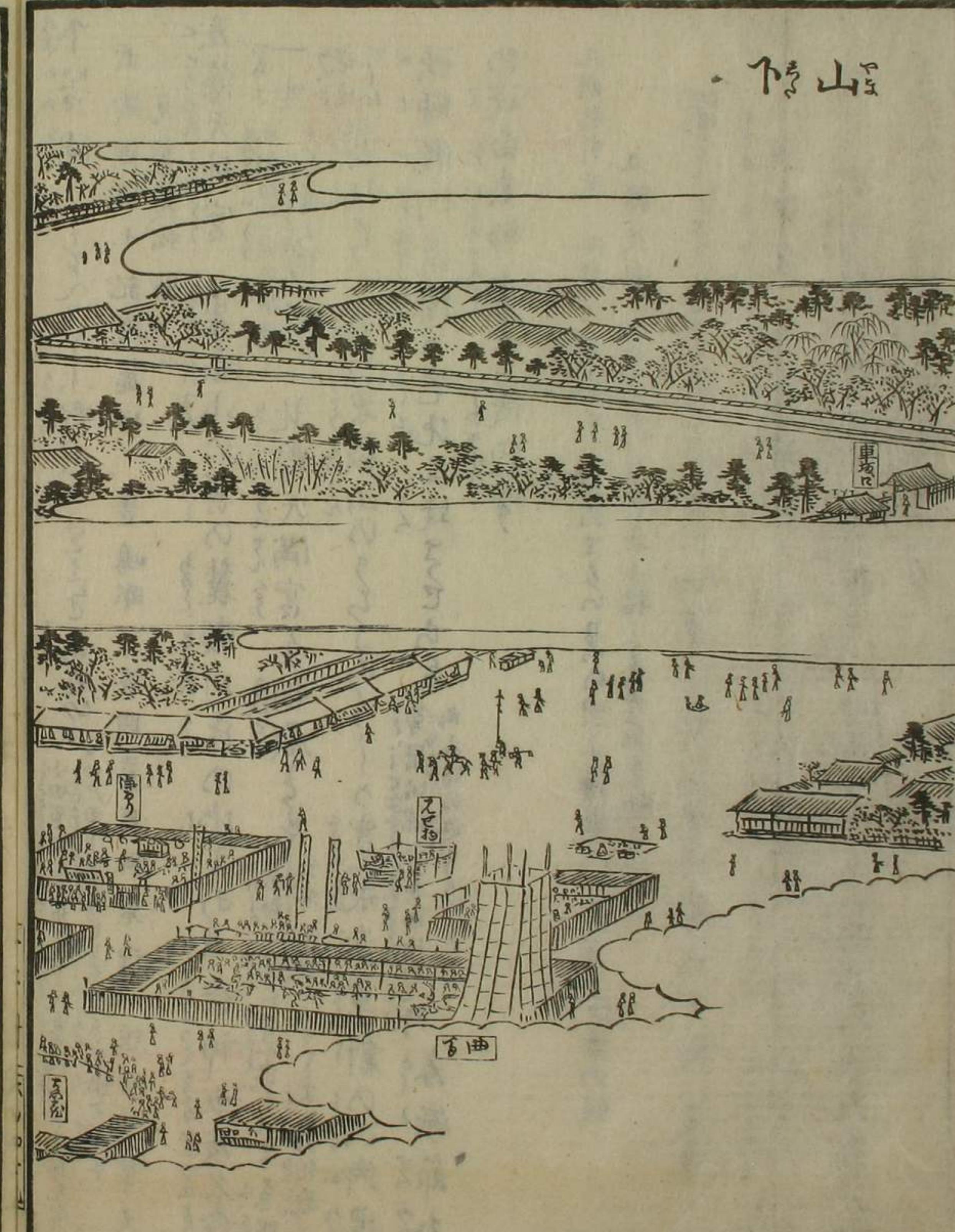
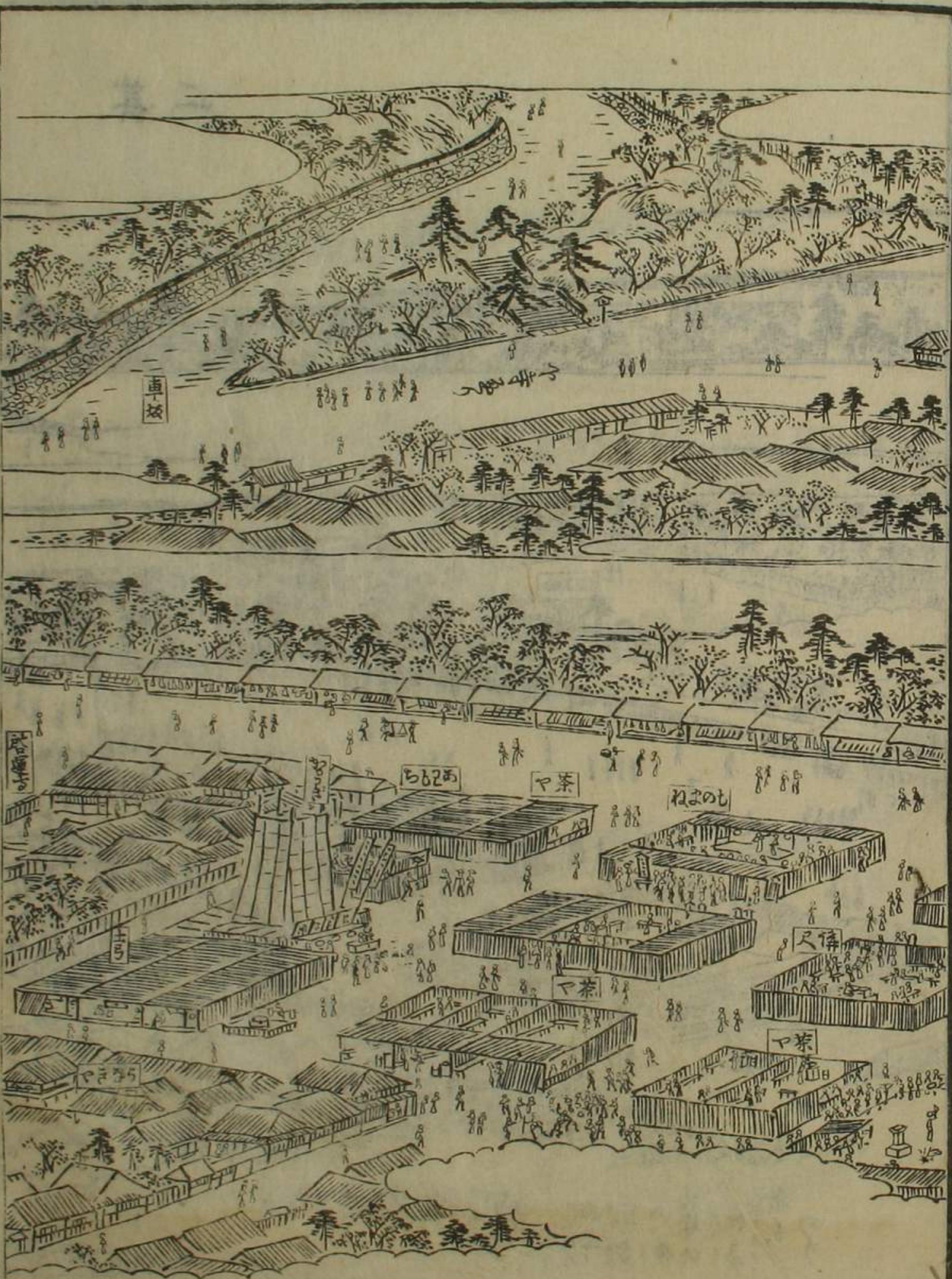
宝王山常樂院 長福寺と号す天台宗五條天神の南多川の向

年

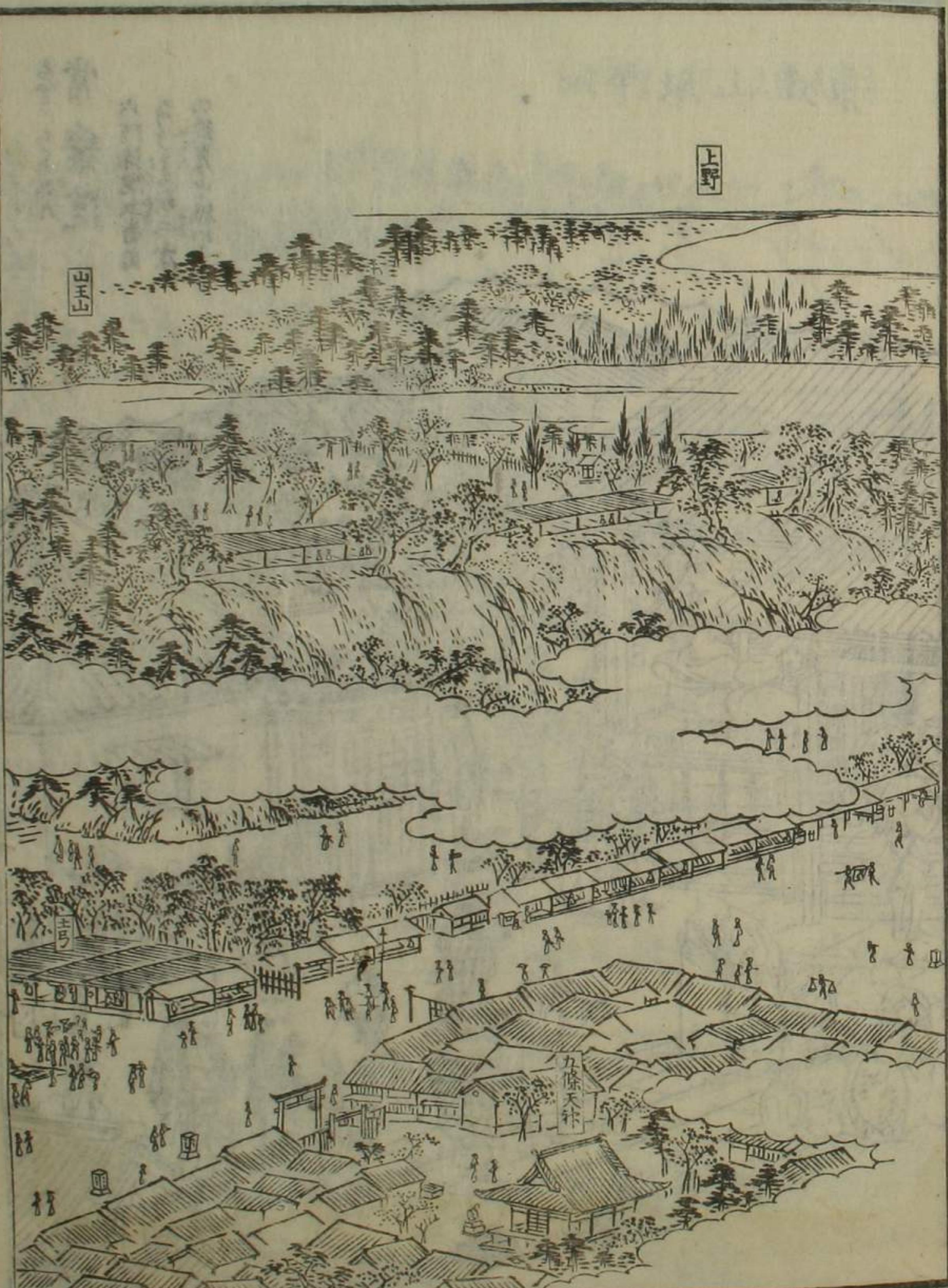
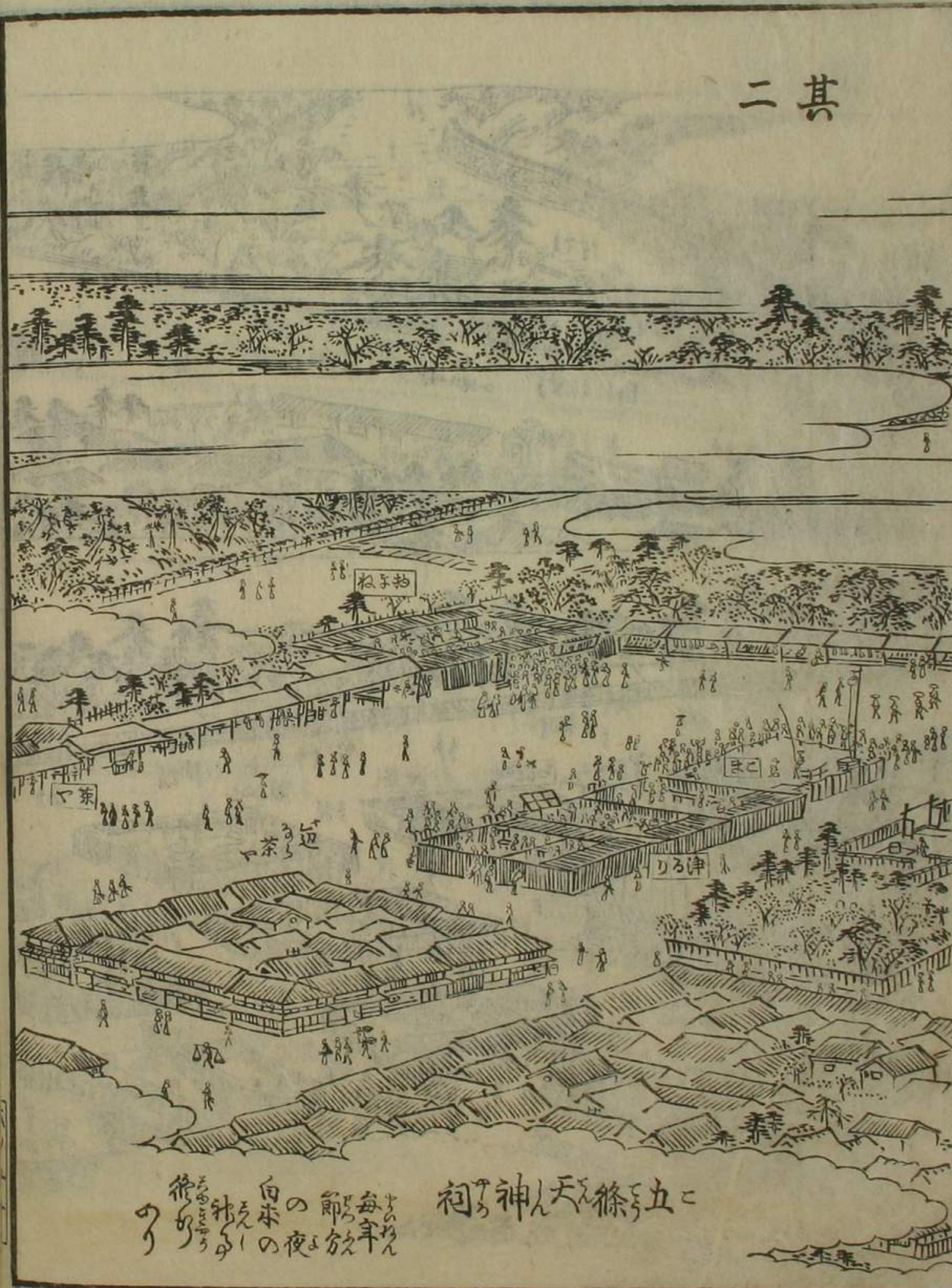
又ゆう本多阿流院即木行基大士の作すて六所佛院第五番目

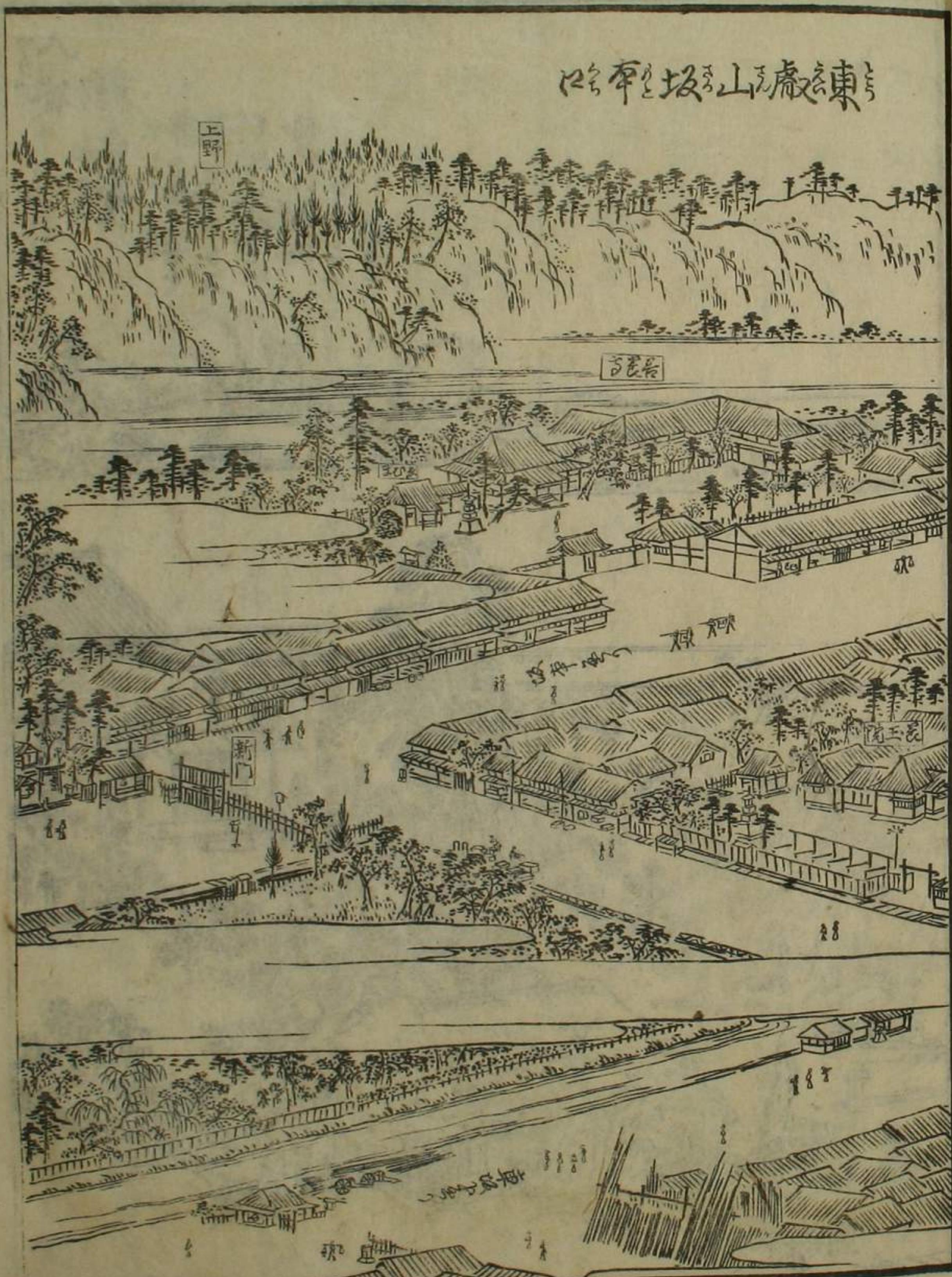
年

至二月八月の彼岸中甚振ひ



其二





八谷
庚申堂

喜宝院より
拂の天王の
青面金剛と
因幡の靈像



金光山狼玉院
下坂奉壹丁目の南より天台宗より往昔今
の御内大手の邊よりよりと慶長の頃今之に又过る
古の二觀院と号ひを宝永年間今之名改りとて當寺より
の涅槃像の画軸一幅を藏し又慈眼大師の讚ありニ圓傳燈大
僧正天海書ともある也又毎年二月十五日是日津

藥王山善養寺
延壽院と号しと同石坂奉壹丁目の左側より天台
宗よりて奉尊の藥師如来を安坐し
當寺の天長年中慈貴大師の草創奉も同大師
の作なりといふ額は圓滿の二字を刻し黄壁木庵老人の筆す
境内は圓魔堂あり圓土の像の運慶の作なり正月七月十六日奉

詣羣集と
野照崎明神社
同所三丁目の右側より祭神恭儀小野翁の
靈りといふと社傳あれとも詳れらを故ニ始より畠と當社の坂

本の鎮守よりて八月十九日を以て祭圓とぞ別當の天台示す

小野山嶺松院と号す

或人云當社の其先より出よ垂堂あり頃その傍より小野の林と稱せ小野山ふ
ク佛教を宗敎し所別是利と學を授を廟く然其後御地より垂堂の傍より草木を
奉る祭祀を施行とすもむかにケとの例より奉り出を堂の傍より垂堂と云堂傷鳥
延の後今の地へ移れり又云當社の地主は神の使者ありて白蛇夜あよ屋の赤
鷹がやたゞ台嶺の松樹よ映しきれり尾の先鷹とりふ意より彼峰混じ交へ小野宮碑と
書けりと云え

佛迎山安樂寺

金松より正保年中正蓮社意的和尚當寺を創立と
御宝殿の舊也と云ふ

一心院のホナツ捨立一流の淨域なり昼夜不退念佛三昧す

了殊勝う

寶鏡山圓光寺

根岸の里より拂家の禪林と釋迦如來を
奉るゝと當寺庭中小塔並びて花の頃の一奇觀たりと云ふ俗
間あれ成善寺と称りて堂前より鏡の松と唱る名樹あり
鎮守の辯財天の弘法大師の作と云ふと云ふ

小野照崎の神社



金松
安樂寺



根岸

圓

光寺

世俗
とくふ

根岸
ねぎし

庭中架と
篠らへて是を
躰のもの
三に又え
花色最
麗美うり



時雨岡

岡所庚申塚と之るより三四丁艮の方小川より傍アリ一株の古松のりと不動尊の草堂あり土人此松を御行の松と号奉由始くことよ省界を松もよ

圓圓雜記

タツノの岡と之る不道松原のありある

カツヨヤミミト

霜の後ゆづれ小なり財雨をひそひの出の松もひれ

道典准后

按山の出とくろ東嶽山の旧名より此地も東嶽山より連綿たり圆圓雜記より

ところの私家の意を重て後世好事の人の手にまわる

東陽山正燈寺

龍泉寺

年より愚堂和尚草創也

禪房の供傳を數起も宝樹圓寂の崇縉より

の後園楓樹多々

其先山號高雄山

其紅艶を賞也

東陽山正燈寺

龍泉寺

年より妙心寺派の禪刹也

和尚の大因宝鑑圓寂と謚年と天性相合りと大よ

當寺

の後園楓樹多々

其先山號高雄山

其紅艶を賞也

東陽山正燈寺

龍泉寺

年より妙心寺派の禪刹也

呉竹の根巻の里へ
上井の山廬にて
幽趣ゆうしき故ゆゑ
都下の遊人多く
小隱棲と花み
かく水アモム
種もとりよろゆ
産すりの其声

ひとうありそ

世よ賞愛



時雨岡

不動堂



田國雜記

雨相の後

ゆうじよ

時雨と

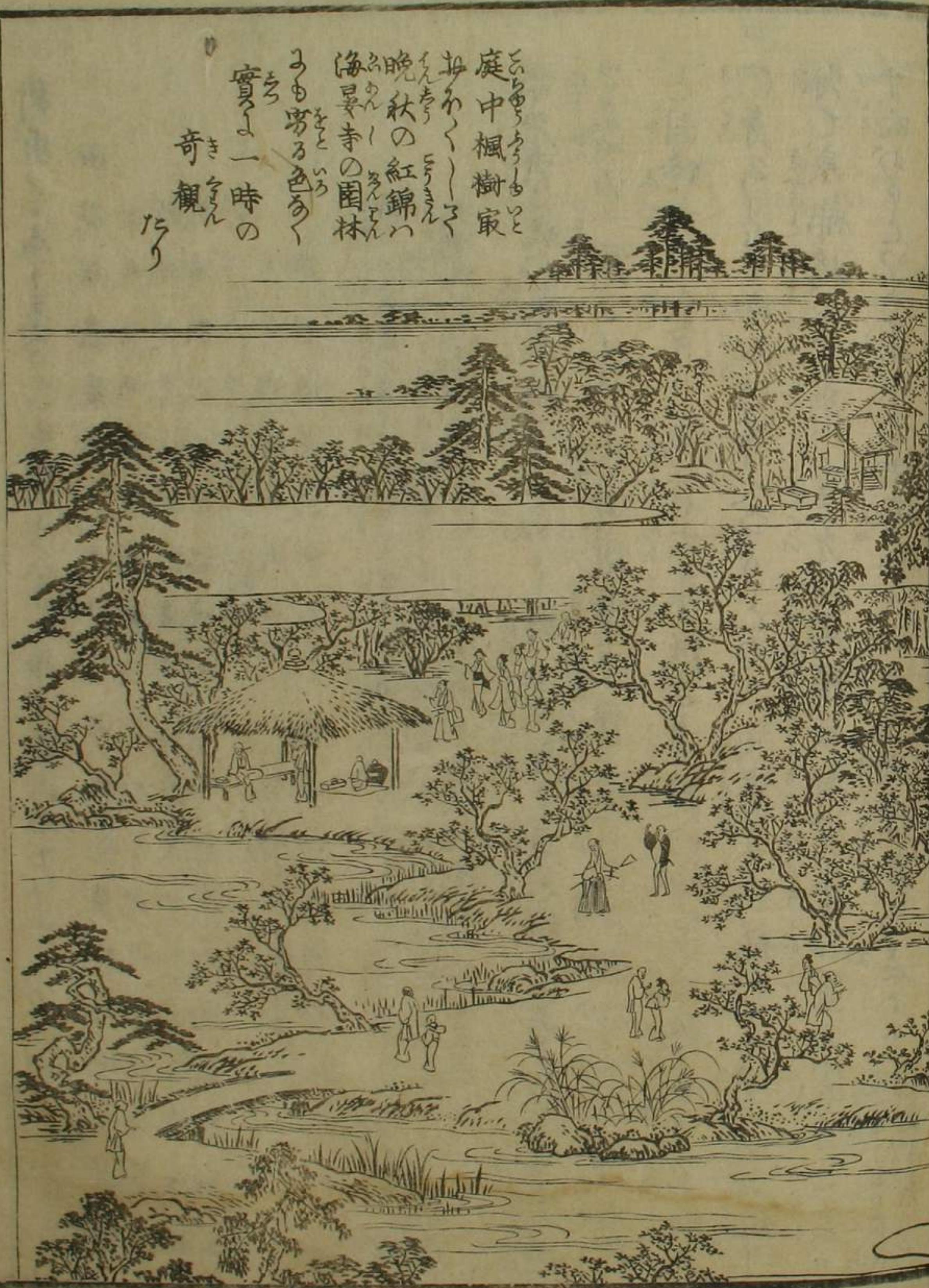
多ひの岡の

松もひ

き

道真准后

正季
楓の寺燈



庭中楓樹寂
晩秋の紅錦
海晏寺の園林
みもいろの色
實より一時の
奇觀

軒近くあらえうと宿うひと待夜のやひよとわづけ

梅

花無盡藏云余在洛而聳厥聲譽久之矣今也共寓武野之正脉

賜詠歌三篇可謂暗投也聊奉攀未篇之韵脚云

二月六日

文明二十七年乙丑

月廿六日也

非老年伴

一吟聊答數篇韵

隅田

春色浪如花

鳥若知都

稻細問

按孝範在の事は成る國豐嶋といふ所より入にけり所より往々あり芦^{ホウ}と號すと云又梅花をぞやの詩の序よりかと云ふ羅鈎翁と号す一也由武郎の佳境隅田の上流より寓とつり合せ考へまほニ作鶴の地跡との如跡アハシミ

本戸孝範ハ從五位下叙前ニ河守と云又羅鈎翁と号も今川
子俊の一族よりを田道灌東常縁及び正徳宗祇公致万里探
と同時其の人なり薦食大草紙又孝範の冷泉中納言持た御の
門弟より參双の哥人なりとおり同書又長縁元年冥東の札了
休て京都將軍家の金吉才左馬頭政智冥東招軍の宣旨を承り
や向あとつりの条下より供奉の人の中より孝範の名あり

孝範建武二年

徽食大草紙又永德二年氏備小山義政退治の功發勑とある条下より大將の大將の中より本戸孝範
季と云名を擧く同書永二十三年憲基の祺りと云又圓玉清寺と對死の人の中より
本戸孝範と云名を住す行れど其氏族の人なりへれどもりゆく系譜を考へど
萬里居士寓居地前より記すアリ万里居士本戸孝範と其の子隅田竹の上流より寓と云
きと万里居士諱の端九初花洛の萬年寺に入大主和尚より從ふて其法
を受く禪機文材ありと名譽四方より揚る應仁の乱を避てにた農尾の
間より寓と後淳暉の業を廢して自築桶居士と号し又一ノ梅花無盡珍
と稀と文明の末東武遊ゆ方田道灌養遇甚渥一灌歿して後濃
小歸三老を投と曾て天下向二十五巻を著と文明中東遊の詩文集
あり梅花無盡藏と号く

塾田明神社

新鳥越小より祭る所日本武尊一坐より當社へ往古え

鳥越の地より正保年中今所より例祭の隣年六月十五日

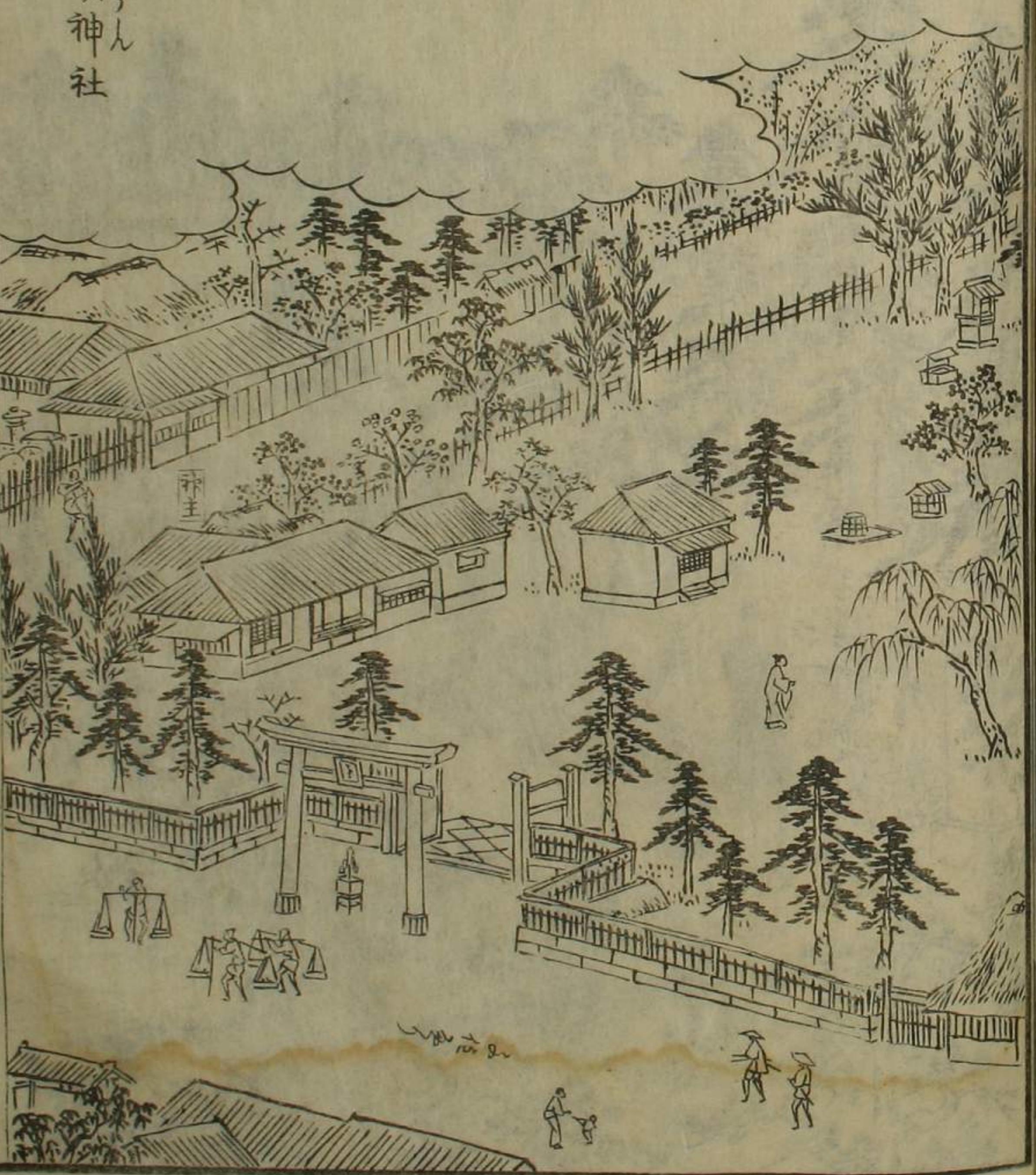
执行也

駿馬塚

同所南側何んか某より別荘の中より傳云康平中原義家東征

之より

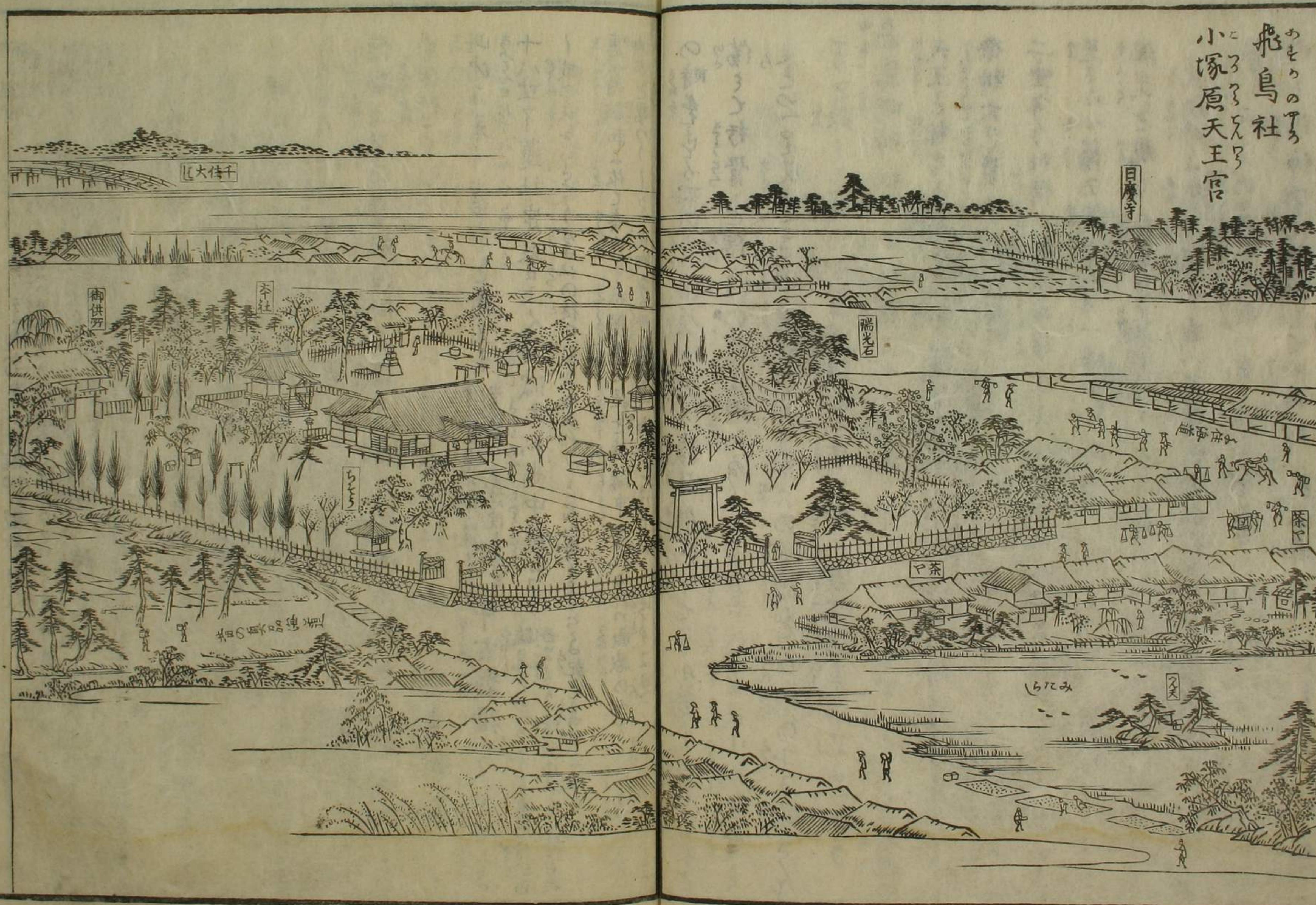
山元
熱田
田明神社



駿馬塚



の時先むと不の青海原といふ發足偶病にてかく小覺と云大又是を
傷みて朽骨を葬路の傍より埋めゆることと其後里民小祠を堂を
建とひ又近き頃其地のあり云の明徳をみ歲のやう顯さん
工と欲して塚の側より石碑を建て祠の東の方より迂なり
鳩鳥明神社 小塚原より此地の産土神ととせ人混じて賽輪の
天王と称せり列坐する聖護院宮あるて莉石山神翁寺と号す
祭神大己貴命日本紀古語拾遺等云大己貴命の御子ありとあり事代主命右事記云事代主命は素盞嗚命の御子ありとあり事代主命大己貴命の御子ありとあり二坐す社傳同往古延曆年中比叡の黒肱師東國化度の御此也ス至る小小條の茂るたる一堆の小塚あり此塚より此地をよみつら其塚より夜かく
瑞光を現し白衣を着たる二人の翁荆棘生る石の上に降臨あり
て黒肱師よりて曰く我の素盞嗚命の和龜大己貴命なりと
是より又一人の翁曰く我の事代主命なりと天王と称是より天王と呼ぶ云云仍て忍教鶴
仰く清淨の心を撰むて此神代一社を奉すと牛改天王の年號六月二日より日九日ともす住大樹の南詩よ



豊徳山誓願寺 惠心院と号す。飛鳥明神の北より。淨土宗より。
幸多よ阿弥陀如来を安坐し。尼基ハ惠心僧都なり。

寺傳曰僧都顯密の二教を究め於諸宗を渡て遂に佛陀の本願
をきみうるまくうえうらうちふとくあくわちかのうけ今世念佛
よ帰入し生生要集等を著して云々自化を化りその頃

弘法の教説
僧都上足の慶祐法師より語りて曰く念佛の教いすと東圓弘法ら
きくはまよしゆくひろ

を改行す弘法もへとすり仍慶祐法師命を受東陥よ逃れ
えらきまくまへんくわいえんじゆうじめいをうけとうせんよおとる
此地よまく當寺を建立せ
當寺をも惠心院と号せ
中右額破セを増上す

まちにわざと書く恵心僧の
臨尾といふる書く恵心僧の
十八世了蓮社定巻言上人隨は大和尚中興ぢり
母ノミシテ行持の力とへ妨られ
戒の文をさだてり是が仏の徒の教もすれりとらひ得るもとより記と其文云く

惠心僧都執は依て奈内（なない）と称讚淨土經を侍講申され
されられの歎感のあつた事（こと）をよみ
御衣（ごろい）を錫（すく）り（さし）一（ひと）うれ在鄉（なまむら）より母（おやこ）の方へ御衣（ごろい）を送（おもせ）らん
送（おもせ）りゆ是（これ）と榮（さか）と悦（え）と

乞々くまくよ懐かれ共其義也
此の不登可と申すよりもれくしやうさんをくづるれどもとて道人
のらはりあひて後かありともれくしやうさんをくづるれどもとて道人
のうふに御大裡のうそとぞありひ一官位よもと青甲紫甲不
可とぞありふれどもとぞありひ一官位よもと青甲紫甲不

そのひろとわく君よひうひとよひう御經講讀へ御布施のめのとくひひ行の名下利
養のひよとくそくねなまかに供さよ唯命と限りよ樹や石上のもよみ草とくせ
食よ死をゆくもと本をうる巻物をひうひ偏よ後せうとわんともくよとこそとくらべ
くらべ

あくとをゆうされを面目ともひひゆひひきへ
香のせよ御にあひて佛の御もよくなれ
されらりとよろとそくとけんめんすよまつりをえらめて
わゆきをたまへ 佛法をまつまう賢人まつ
首陽山まつまうりと玉命まつまうひやと

やとうやのんや利髪深衣のれぬと捨ての行よりしたまふるのひも
茶うのえ勅定よやけに男女雜居の所へり出さむをやうに御衣わらす
わらすゆくは如法説の心は布施ようされどいじ獄よ駄さるとともや
わらすゆくは如法説の心は布施ようされどいじ獄よ駄さるとともや

称讚淨土經講讀の如布施の御衣此尼よりて仰と申へくじて後西
ありて三途より後（後より）とあきあんとも申へてすまうと申へ
法師よか（一） 佐云々 以上取意累文

嗚呼、眞ううれしの老体安らかと僧侶も後立を厭
要集と述へ、自亦を利益へたまつて、またの僧法師、權門勢にあれども、うらうらつた偏ひて名を
りとめ利とし、うらうらの此老尼の筆のあとをうらうら面よ併せとてありさんや。豈よ惡體
うらうらの禽獸よもぞうらうらの僧行爲りの如きとぞ、おまのとうらうら
をくわらへん後人のとくへむからん所ねりけり云々

千住川

荒川

下流

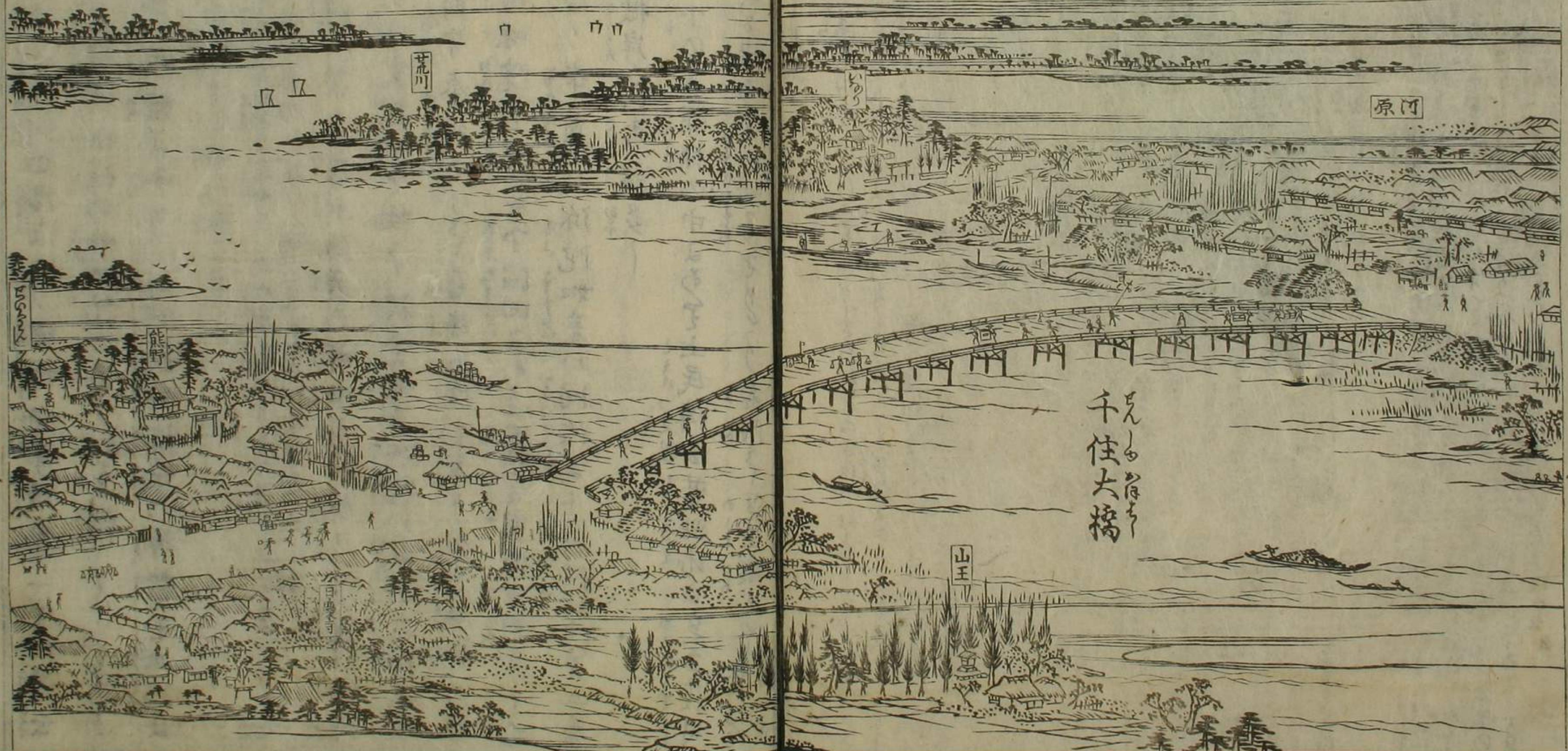
隅田川の
荒川の下流
隅田川の上流

隅田川上流

原河

千住大橋

山王



くまの えんりん
熊野 権現社 同北の方 千住川の傍より 祭神 伊弉冊尊 一坐社傳云
えのき
永承年中 義家朝臣奥州征伐の時此地より 町を渡りんとまつり
きい
奇異の靈階たり 故よ鎧櫓は安セ
紀州熊野 権現の神幣を此地より

とくめて熊野 権限と森林にてすくとく

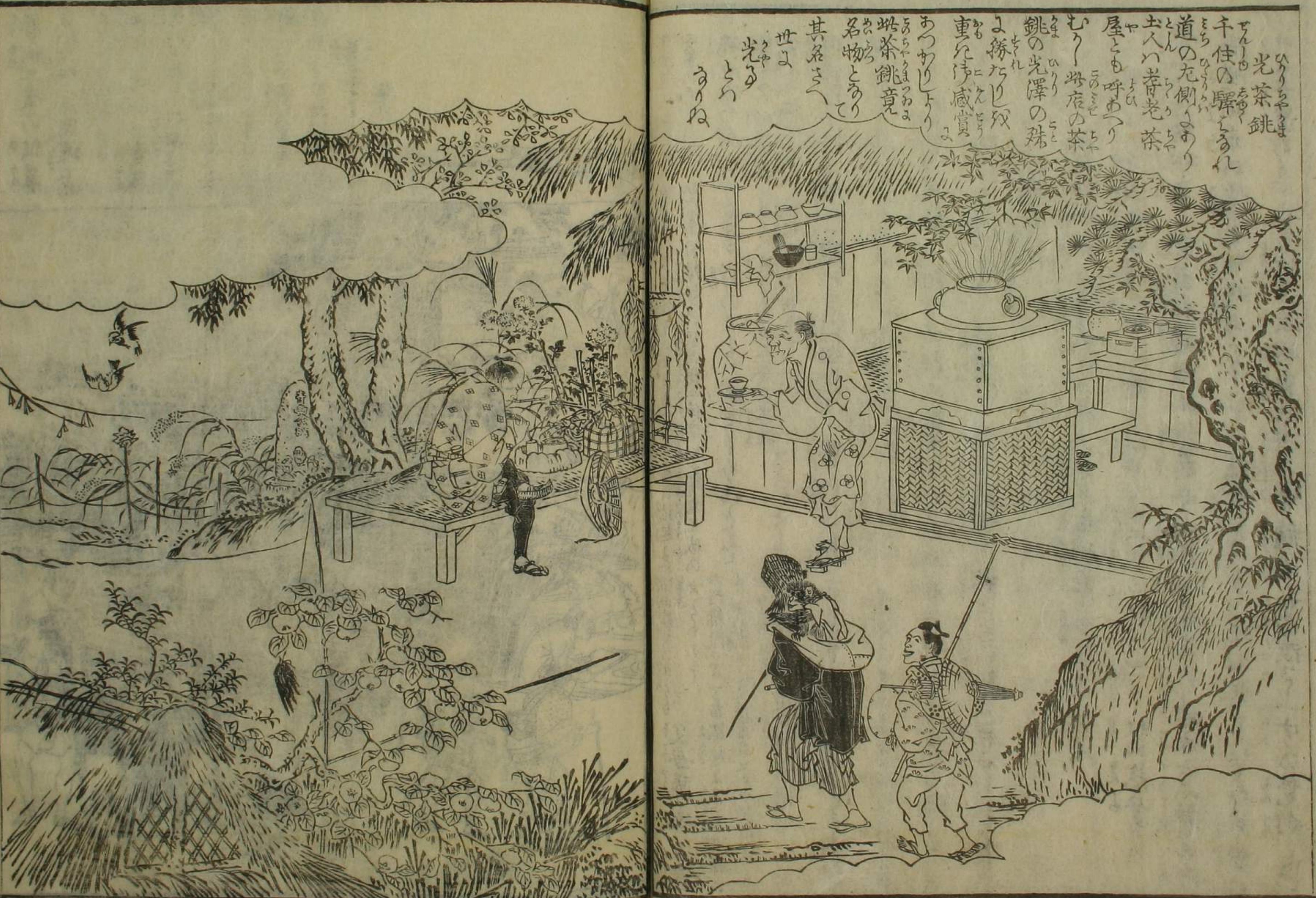
甲午九月伊奈備前守奉行と普請あり。今より連綿たる
其露山延命寺 應味院と号して下沼田より真言宗の右刹として
行基大士の草創なり。奉尊阿弥陀如来が同作みて六門弥陀第ニ番
同とて春秋二度の彼岸より參詣多し。
富士浅向祠 同所川下の方深林の中より土民傳云昔此地より足立莊司

よしとくのじよ
ひとくのじよ
みく 宮博宰相といふ者ありそ一女子をりて名附く足立姫といふ才一番

六番目六番目とひ六番目縁起より従二位宰相兼原正成の女ともある
鳴た御つ耐るゝやう者なりと城でめんととめとへ送ると又四番目立番目六番目
縁起より沼田由補のりと送るとあら三番目縁起
余本の源氏等の縁起上アリゆ
されとも彼女子常ニ佛神を教するの
外化す故ニ是より隨りと父母強ニ婚姻を齧りとくとも終此よりとぬや

又源田川とも云ふ住川の侍女も又ともよ身を投て死
患へとう竟よ荒川よ入くと上まく豊島川のゆき侍女も又ともよ身を投て死
ち仍在司悲歎よ絶と又村人彼女す等の行跡のたゆむを稱其同
六月朔日のみあれども其靈を富士淺間と称して一社は奉すりと云
れども其説未詳

向瀬 同所の向瀬をうそちろひと足立姫瀬元の所うそとひ
十二天 義足立姫瀬の侍女の足骨を收めて十二天と称し船方材の慈寧寺
餘木門跡院辨にま 宮城村龍燈山性翁寺より安と往行基大士六軒の門
弥陀如来の像を彌刻あらうその餘材を以て是が仏造とたまひ草堂の
中より安置ありと遙々後明惠の頃正善龍呑和尚改之一字の梵刹とひ



光茶跳
千住の驛もあれ
道の左側より
土人の耆老茶
屋とも呼べり
むしゆの茶
鎌の光澤の殊
世よ
光る
其名まへ
あつかりよ
重ねて感賞す
あらやまつゆ
嵯茶跳竟
名物とあり

す
き
ま
く

春秋二度の彼岸
日のかけの麗うるよ
えの六阿弥陀院廻とを
催され都下の貴様
老いた若さ打群浦
朝とて宅居を出ると
ひつも行程をりれば
遅くらむ春の日も
長かくと秋ひとときも

暮すま
ゆりのふ



て此地より住りゆす則此寺の元祖たる當寺より足立姫の墳墓と稱せらるりのあれとも詳しきと

五智山總持寺

西新井村より真言宗より遍照院と号を弘法大師の

草創にて卒後弘法大師の靈像も同作より靈驗著く毎月廿一日より

或人云當寺弘法大師の靈像の如き北總真間山弘法寺より置

安置ありと名前頗る有り

或人云當寺弘法大師の靈像の如き北總真間山弘法寺より安

井其靈也此井より修業水を西新井と稱せらるり

阿佐井

其靈也此井より修業水を西新井と稱せらるり

八幡宮

六月材より別當を空天寺と号と傳云八幡左郎義家朝臣

奥州征伐の時此國の野武士とも道を遮る其時六月空天寺ノ内に味方の

勢勢も戦ひてより氣色もあらずよしと義家朝臣が中又鎌倉八幡宮を

初念ありしれど不思儀と大陽繞り如く先手を背ふとやれの敵の野武士木日

小也の故と眼を失ひ大敗北し依て此地より八幡宮を勧請ありしとと此

故より材を六月より寺を天と称し又幡正山と號すとあり

白旗塚

伊豆材田の中より傳云往古八幡左郎義家朝臣奥州征伐の時

此地より向旗を建武元年と謂へり此處ありと近頃此塚上より小祠あり

其傍へ立寄りのあれは崇むる故社荒廢よりひれとて其傍より再建も

せよと今塚をくりとなせり

今も此塚の上より

此邊の田面を向旗耕化と

之又向旗と稱する五箇所あり

鳴首實機あり後其

萬德山明玉院

梅林寺と号と梅田村より新義の真言宗より草尊

比翁菩薩を安坐と寺記云當院安基志左二郎先生義廣と八幡左郎義家

の孫六條判官為義の三男より

始常陸國伊勢住後國志左村より

の志左を以て本号と云ふ草平家物語高畠作初武別

摂戸又一院を創基し初願所と云

當院是より昔を云

是より先治承の頃頼朝初

ア義兵を起との時義廣自立の志あり放々頼朝と隨りと創て小山小四郎朝

政が為よ敗らる其後同在馬と義純の孫より蟄居して此梅田村より住む

外右の方と廓と字をもつて姓古

其裔常陸久廣二代の孫

義純の子の志左と號す

を勧請し鎮守とぞ又神告より姓を梅田と改め小ち郎と号を又邊より

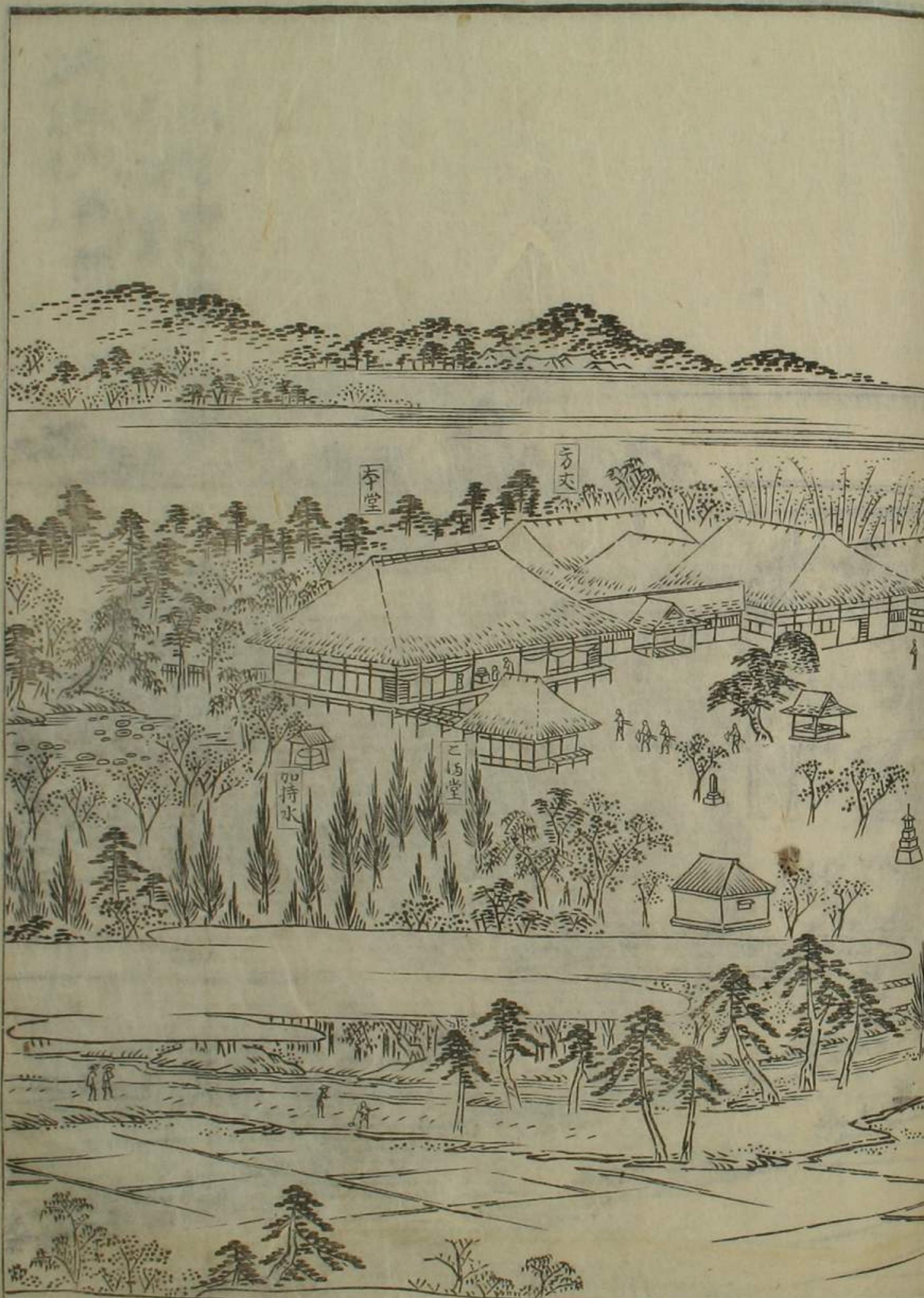
永正年間室東大より乱る同志郎左衛門久義

久光の子より後左馬と号と是を

西新井大師堂

毎月廿一日

元春めり



梅田天神祠
別當明王院



厭ひ丹別鳴村城より移り住し又同國峯山城より移るといふも遂に敵の爲より生害と長子久頼をすみ久友續て峯山より住セリ其後國民當院より亂へ遂に破壊を受ヒ一を慶長の頃頼専坊久義のゆき今之地より遷り寺院を再興し真知法印を以て中興宝山とぞ又寛永二十年の春大樹御放鷹のまき立

大樹

御放雁鳥のまきえ

うちをひ辱すも當院の末由を冥／＼召れ寺領等と附已らる
不動堂 本堂右の方より卒する不動明王弘法大師の作みて寶鏡上人根東傳法院草創あり頃
護摩堂の卒するより安坐ありしを天正三年故ありと荒洛殿中山清宗寺より移奉又寛保元年
不思儀の靈感ありよ仍ア
獨よ當寺の安坐アと云
天満宮祠 不動堂の後の方小き丘の上より古松の
天満宮祠 やより走り寺記の中によつまひくうす

一位鷲大明神社
花亦材ニ有リ此地の產土神とも祭神詳ニと奉祀を釋
迦如末ナリて鷲ニモ無シト鮶相ナリ別當ハ真言宗ナリて正覺院と号ヒ
毎岁十一月丙寅以て祭日トセテ縁起同卒也秋迦牟尼如来の新羅ニ郎
義光崇教の靈像ナリ天喜の昔奥列安倍貞任叛送を企るの時卒する
示現ヨリテ其軍勝利あり由を記シタル其說詳ニと

接よ當社舊寺大明神より土師太内升ありへりとて之の儀家の御代りトテ譲るもあれどある當社を立俗成
草觀音の南大院と称と見是よりて考ふるよ淺草寺縁起のうちよ土師辰中知をもひ橋前濱成
竹城といふる漁者主役三人の名を号すたり曰幸紀又金仁天皇ニ十二年所見宿稱ゆもりて土師ほ
の姓を賜てトとあれハ此の中知も其遠裔也アリヘリ
所見者稱ハ天稟日命十四世の孫也ト云記又天稟日命又續日本紀
曰捨前舍人直由加麻呂といふるむすの國加美郡の人よりて土師姓と號と同也とあれハ此賓成也故也武秀國
の人よりて主役二人ともよ姓ハ土師也アヘト古事記又天苦比命の子ア建比良鳥牟とシテ神也ト云也土師姓の祖
あれハ彼二人の換者の草あと墨等の祐を紫也アリ一ノのるもん缺當社は毎年十一月酉の日祭ありサ
酉のまちと云まちの祭の畠語アリ此日近々の農民家鷦を奉納モ豈日納ル不のあれ鷦をくじけ奉
觀音の堂あよ放つを例とせられ又トテ处ありを以て後人の考を衍の足利義満著

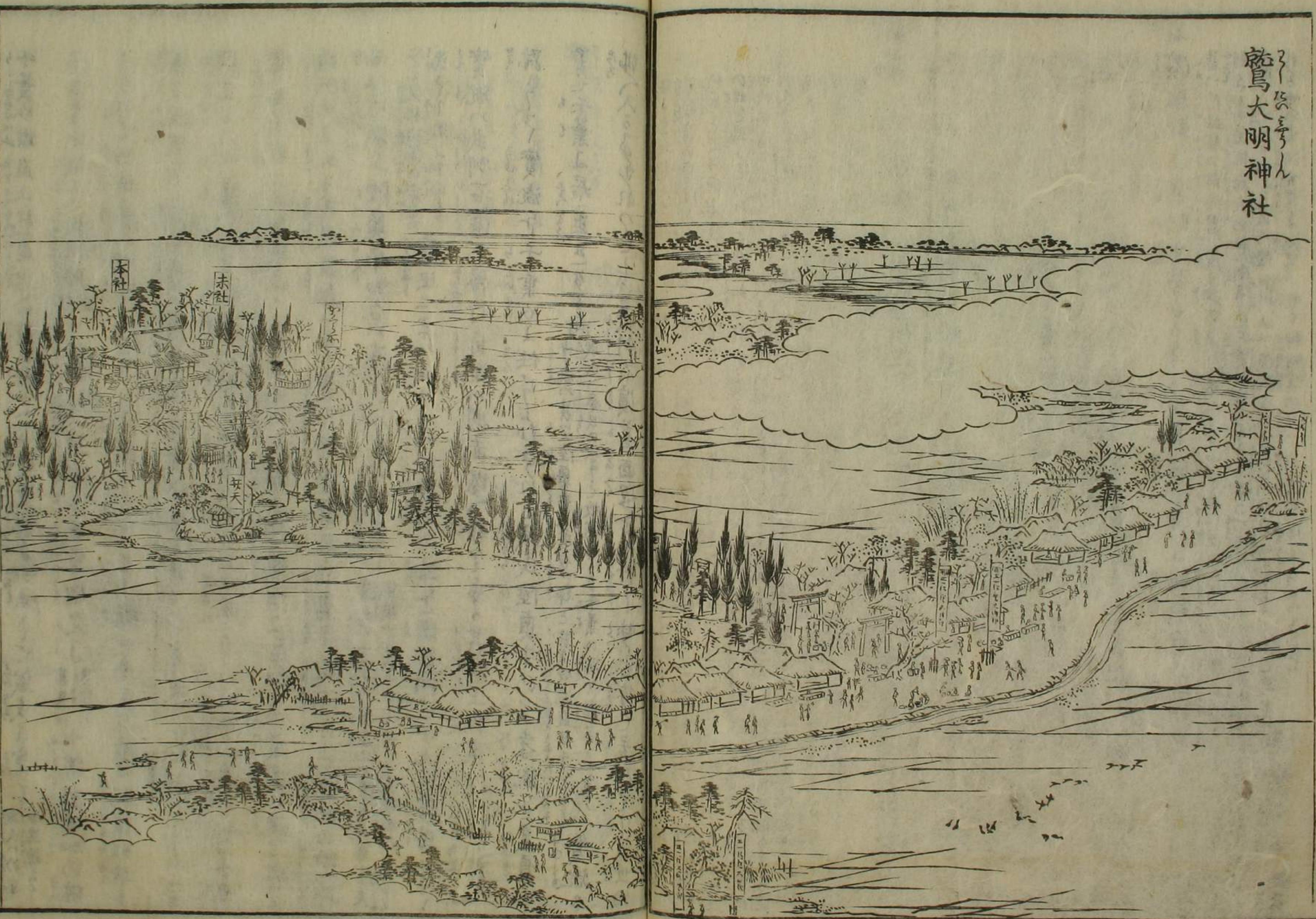
石濱 今橋場といふ義經記又治承四年九月十一日
あすく 戸を郎り知行不すと云云
あすく 右大將頼朝御下總國東船より武藏國へ打綫ゆふとある条又石濱と申
とく 及びに戸を郎り知行不すと云云
とく 重長東船より白山莊司重忠の一族ヨリて其頃豊嶋郡戸の名
とく 条の古文書よき田新六郎同大猿亮不領の中又千東石濱の名を加へタリ又本内官内少卿石濱の今津
を領一或ハ今下寺の領すも附する記也ト云てま總領すのよりて本内官内少卿也を領也ト云石濱地主の
許すには至らぬなり

石濱城址 其地今さくらうと事跡合考よ神明宮の北の方ありとあり按よ電戸と
普門院洪鐘の落陽田川僅く淵のみを舉たり文中よ普門院方の隅田川之勝の傳中よりと云云普門院を
則ふと自流創立の梵刹すと三勝の也モスふ葉死の不領也ト云小田原北条家の古文書よ詳す
之勝と唱へる也ト荒川後川の下流隅田川より養川股の不流よ名也くとめアリ
移ろ時事跡合考よ記也ト如く神明宮の北の方その傳止すとへきを

鎌倉大草紙云

のすゑとあて按よ
中より云々普門院を
あるの古文書によ詳る
鎌倉大草紙云

鷦^{セキ}_ウ大^{タカ}_ヒ明^{アマ}_ヒ神^ミ_ヒ社^ジ



千葉久流直上松憲忠又諱つれ又子兄弟一昧して成氏又肩く

こよまで故千葉大助備亂う二男陸奥守入道常輝父子其子久流馬頭

う打て出成氏の味方と見て合戦と竟く亨徳四年三月廿日流直敗北

其子流宣をうひ千葉入道常輝舍才中勢入道子心等患く切腹をとろく

陸奥守ハ千葉へ縛り千葉の跡を絶ゆる然る上松久流ハ中勢入道不心の子息

實流自流二人を取え下總國市川の跡又橋籠とよきひと千葉家二流とれぞ

總別大よ死る其頃京都と東下野守常縁陸奥守退治とて馬加の跡又

向ひ攻戦ふ陸奥守ゆゑにすて千葉引退く常縁ハ千葉久流の六男東六郎ち夫

也と京都守軍の手をうけたまひて落行自流ハ同赤坂へ縛りをう其後上松家と流直の一

跡久流實流を千葉久流任じむされと成氏陸奥守の子孝胤を見負め

テ千葉久流と並ぶ間孝胤ハ其父陸奥守入道常輝と共よ放流直兄弟を亡くす

實流を捕へ入るゆきれりとして武列石濱菖西切と知行一時を待て居たまへり世の

鷺大明神祭

毎年十一月酉の日
御神事世よりの
傳承する所の如く
近々の農民布施を
貢供を奉修もの後
悉く淺草寺設立
の堂あり故ゆて
舊例も



中を述懐し濃列又宋居を依り上松家より實胤の跡を足の向胤が賜り千葉ゆ

又住毛見を武列の千葉と号す以上廉食大草紙の意を採る

南朝紀傳云丙子康正二年三月千葉の家も成氏と上松と相論によつて

ニヨウノレ惟胤と園城寺の某武列よ類く云云

梅花無盡藏文明丙午隅田河詩註云隅田在武藏

同書下總兩國之間路傍小塚有柳道灌公爲攻下總之上總

片帆千里賣花市上總坂君握中

蓋税寓武之千葉惟種也云云

又室東古戰錄小田原實記等の書より千葉大助備胤の庶子北總馬家の主陸奥守康胤異母弟惟胤

と赤松をあらそひ康胤打孫て總領を極て石賓の所領を委猪一跡を能宗へ譲りとされと天正元年

より石田道灌又庭院を頼りに道灌より高森に移り微力あるをあられど石賓の勢をさうけて是を守

らむ其後惟胤自身を其子次郎胤利あらしく上松朝與よはへりうすく南方の所より退れて江戸の

体を退去し後北条氏康の旗に付属して石賓近辺の所領を委猪一跡を能宗へ譲りとされと天正元年

癸酉七月右の御清義氏下總守の謀を攻る頃御宗討死を仰ぐ其後の石賓の千葉あり女房の主を

男子弟を以て改め氏改の下総と北条常陸久氏繁の三男を娘として被女房と書合ひ入郎猶材と名乗

せふ禁の遺跡相續るよりひあれともいきく幼少のうちに本内上野とよろ着と預り上野討死の後其子

宮内少輔支配ありく其頃の石賓領四千貫文を以て其の妻を嫁すあらねか人の後石賓を逐り

しく常輝と号し大父高胤の二男あり又梅花無盡藏の註より千葉惟種とありも猶を書誌れど南方紀傳を讀と

お一者主の不徳られしを參念し思ひ彼守門を務りし石賓の總領を修み過されどとあり

おうゆ小田原へゆきりてお茶次郎の不行あるべしと石賓領を修み過されどとあり

接するか陸奥守を縫倉大草紙より常輝と一圓東古戰錄より康胤とと紫京譜を考ふるよ康胤入道

上毛子苗西の上平井に至るの則仁伊奥寺信内所と大景窟田保木曾三保大窪以上ふ紫京所領と

云云又接ふ此石賓の傳は天正又延喜千葉の一脉始たりより後廢り

と云ふことよりと云ふことよりと云ふことよりと云ふことよりと云ふことよりと云ふことよりと云ふこと

時一二日の雨よ洪水岸を浸し軍勢渡り兼たゞやんの武衛江戸左郎

重長又仰て浮橋を保つめじとと重長あつて諾ひを依て千葉又常葛西

兵衛重長清とあらじと云ふことのたらう

石賓よ折節西國船の着たゞとね千艘集め二日の中浮橋を組むれり

橋場今神明宮の邊より南の方今戸を限て橋場と称しと舊名の石賓

事跡合考より石賓のきりきちあらうと云ふことよりと云ふことよりと云ふことよりと云ふこと

おと心今のはと間りと云ふことよりと云ふことよりと云ふことよりと云ふことよりと云ふこと

ふらうとあらじ井川刀根川のひくしもうをもくらうと云ふことよりと云ふことよりと云ふこと

ゆゑて更詔記みもあらうと云ふことよりと云ふことよりと云ふことよりと云ふことよりと云ふこと

よと栗川あらうと云ふことよりと云ふことよりと云ふことよりと云ふことよりと云ふこと

まよとよ詳うと云ふことのたらう

兵衛重長清とあらじと云ふことのたらう

石賓よ折節西國船の着たゞとね千艘集め二日の中浮橋を組むれり

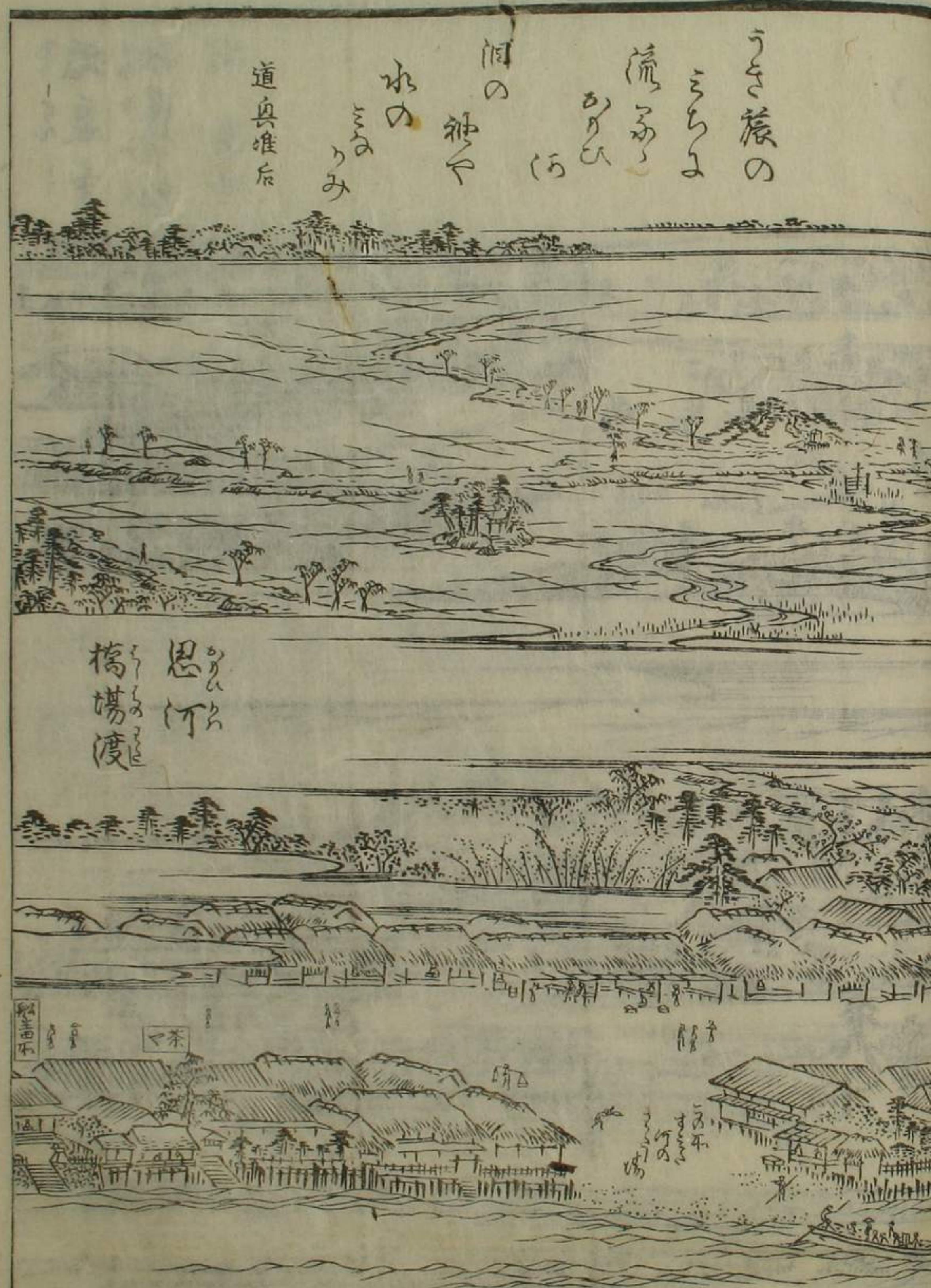


芭蕉

何の
紫雲
一本
落葉

石濱
神明宮
隅田川西岸

其二

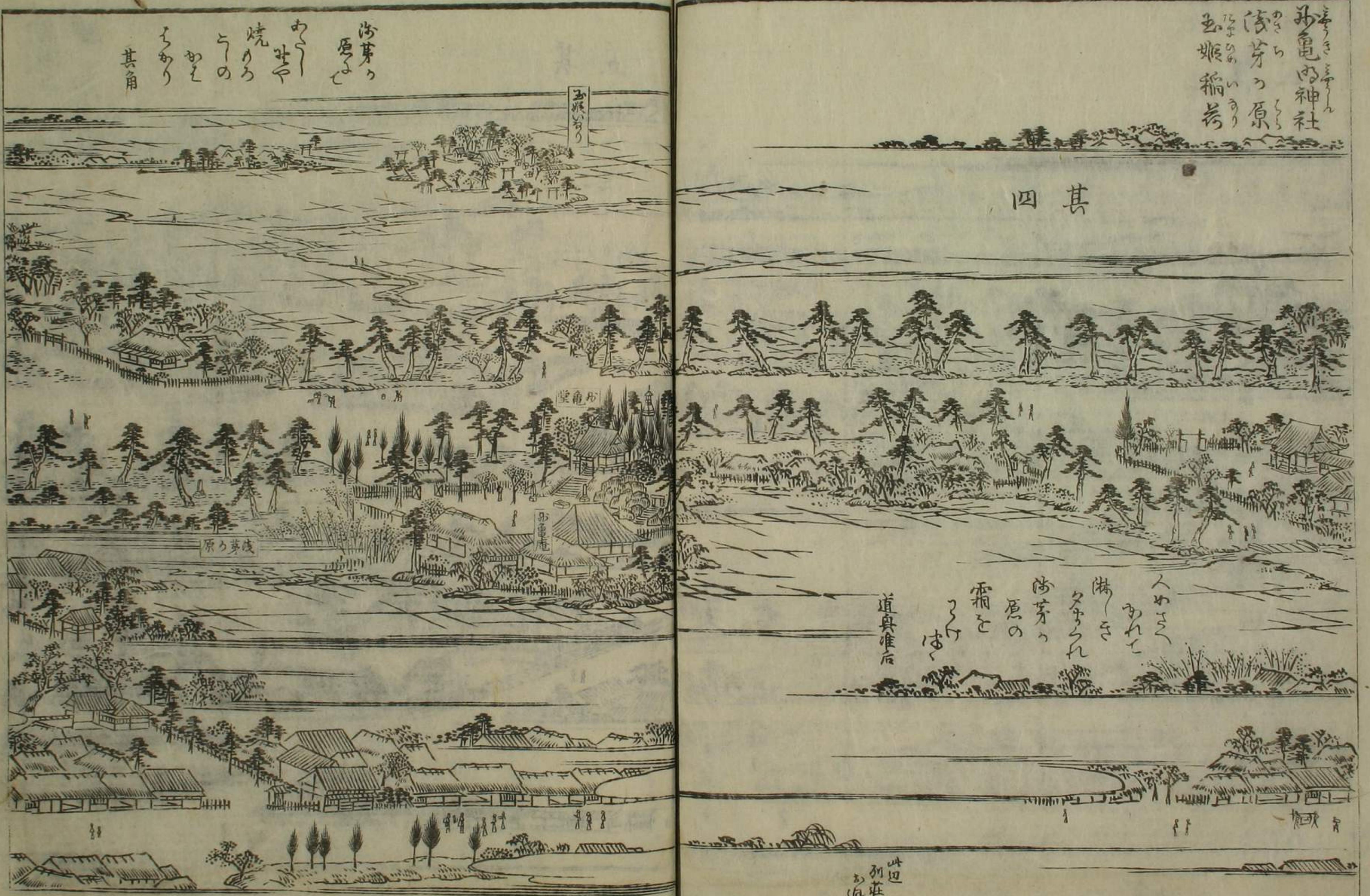


其三



總泉寺
破尾不動
同藥師





法源寺
鏡浦

其五



佐原

神

川

河

水

海

村

島

島

島

島

島

島

島

島

島

島

島

島

島

夫木抄

隅田

河

水

海

村

島

島

島

島

島

島

島

島

島

島

島

梅

花

無

盡

藏

詩

註

云

隅

田

在

武

藏

下

總

兩

國

之

間

路

傍

小

塚

有

柳

道

灌

公

爲

攻

下

總

千

葉

構

長

橋

三

余

云

云

朝

日

神

明

宮

橋

場

よ

あ

と

石

濱

神

神

め

と

も

是

神

伊

勢

伊

勢

よ

回

く

内

外

兩

皇

古

神

宮

成

神

ノ

社

傳

云

人

皇

四

十

五

代

聖

武

天

皇

の

御

宇

神

龜

元

年

甲

子

九

月

十

日

慎

坐

と

云

云

牛

頭

天

王

社

奉

事

神

靈

今

戸

橋

を

ま

で

き

氏

子

の

草

ら

と

く

神

靈

今

戸

橋

を

ま

で

き

氏

子

の

草

ら

と

く

神

靈

今

戸

橋

を

ま

で

き

氏

子

の

草

ら

と

く

神

靈

今

戸

橋

を

ま

で

き

氏

子

の

草

ら

と

く

神

靈

今

戸

橋

を

ま

で

き

氏

子

角田河渡

星宿の道

名子

鄙鳥

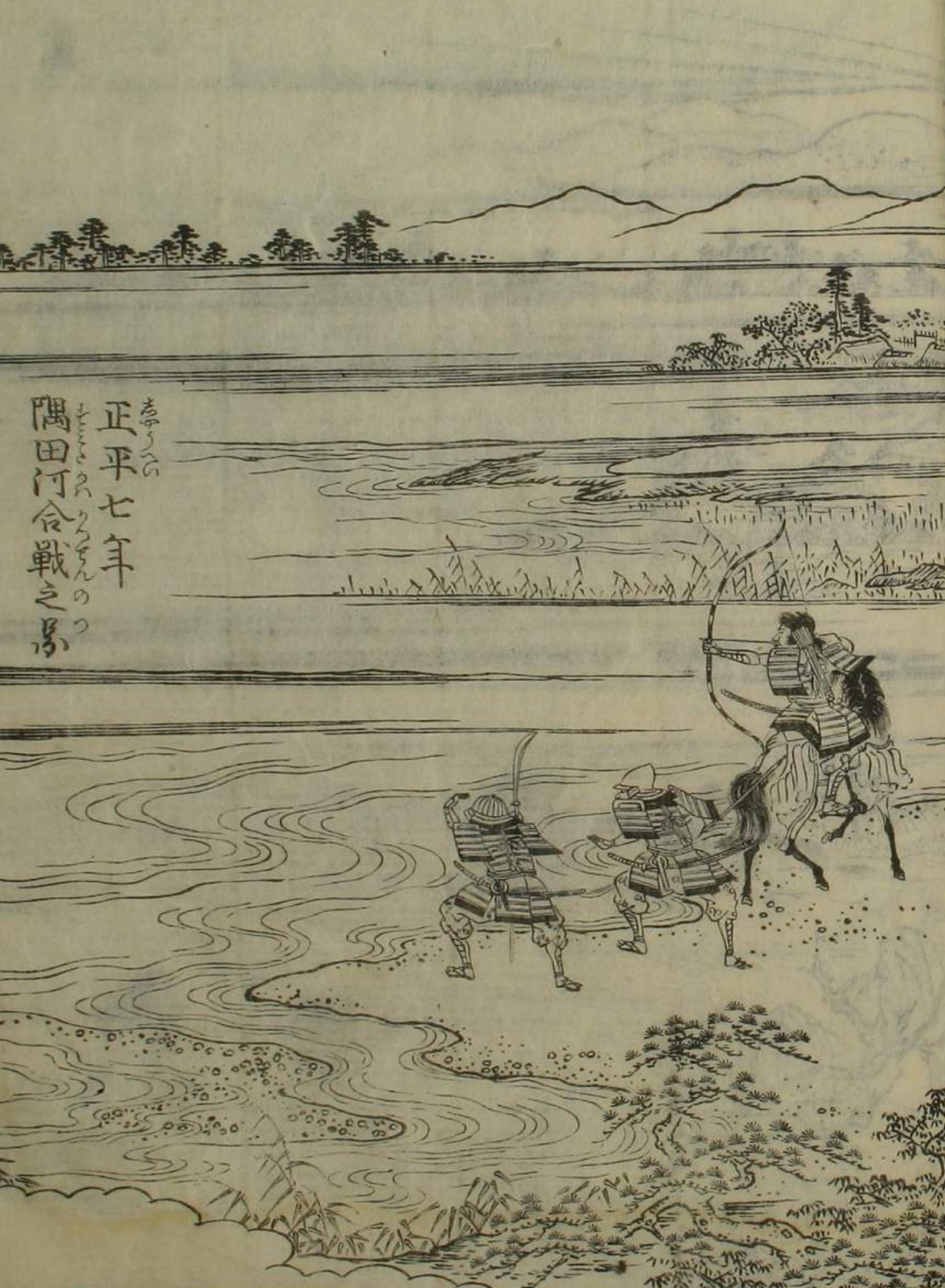
空人

東

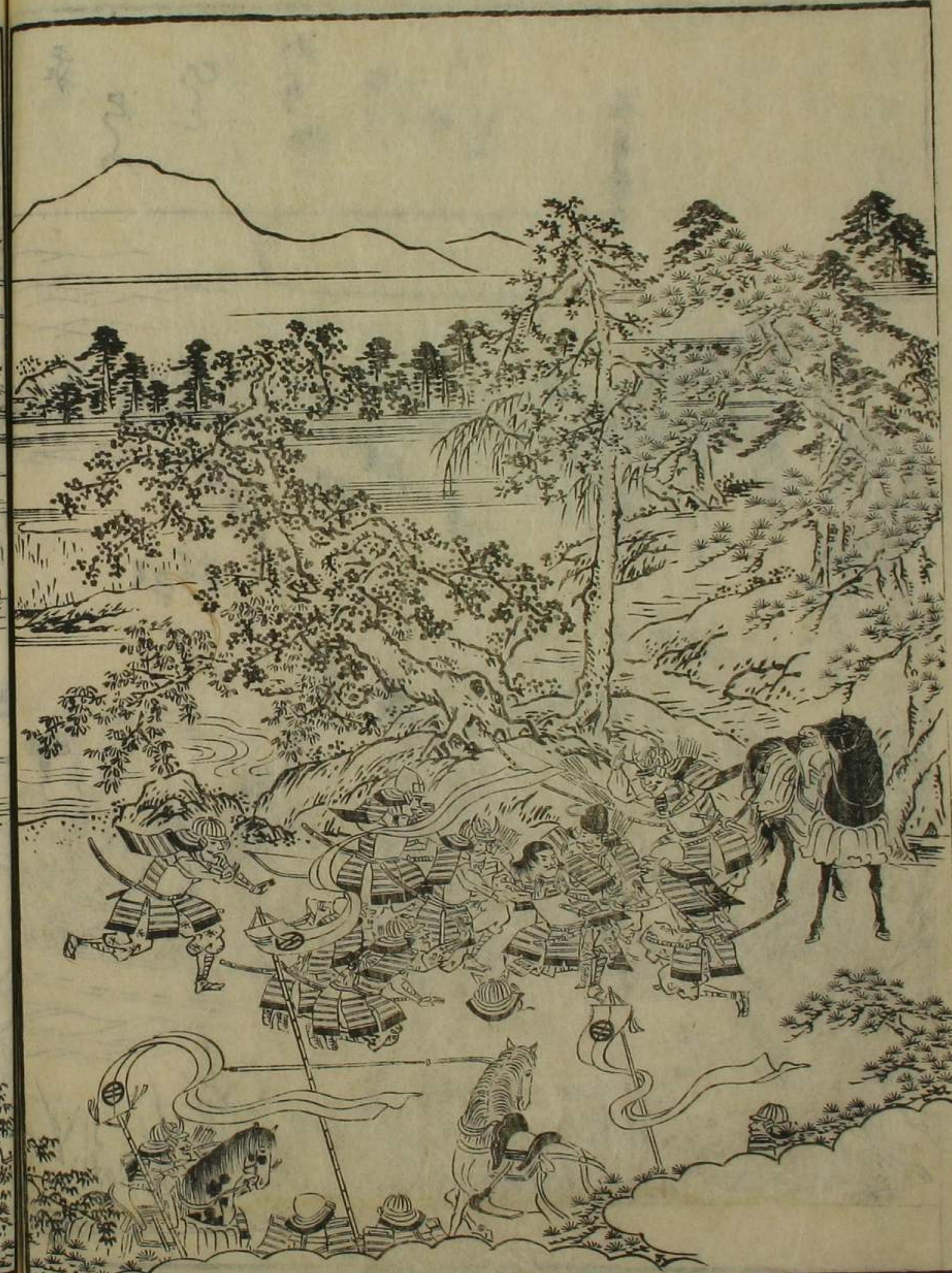
とや
うや
ひと
う

在原業平





正平七年
隅田河合戦之景



其二



神主の名にて代を終本底より
天満宮 車社の右の方より神像へ眞作にて明和四年丁未六月廿日高辻前大納言家長
當社の建久正治の頃盤繁昌の化よりとそ其後の大社より東の諸民伊勢

神主の名にて代を終本底より

天満宮 車社の右の方より神像へ眞作にて明和四年丁未六月廿日高辻前大納言家長

天満宮 車社の右の方より神像へ眞作にて明和四年丁未六月廿日高辻前大納言家長

小春宮せんゆうりかき葦の當社又詣て板を更たとひ殊ノみ祭
宇都宮等の神主尊信し 神田等を寄附于此地昔に奥州街道すと文治
の頃ハ簾金石大ねあも商社又參詣ありとひ是境内樹木多く鬱蒼として
上久らを海峯六月晦日名誠祓を行ひ祭禮は九月十六日より

此日社化又ひと生妻を齋く故不

儀間是を生妻

真先稲荷明神社

同

河内河の流より臨む祭神食稻魂一坐より社傳云

久代千葉久兼亂室跡より靈殊を傳へ此靈殊の加護より數度の戦勝ア

先登の名

りと同守胤の代より此石濱の跡主たまつる味内

の落子

とて彼靈殊をりて稲荷より勧請し

真先稲荷明神と号ひと云

神木櫻 痘瘍の服飲て病を癒す中間の虚より靈泉涌出

本社の額より真崎稲荷大神とあるハ神祇伯ト部朝臣兼雄公の筆ア

神木櫻

病瘍の服飲て病を癒す中間の虚より靈泉涌出

此社前の名よりあく鴨因河の流溶くとて昼夜を捨て食店酒肆の軒端

を河面小臨ひて四時の风光を貯め殊更甚の日は桟を流す法にて空暑を

洒れ秋の夜を中流より掉すて月を掬て其の夕妖艶なる須因堤の花蓋よ

至體をなす向隣本母寺の雪の朝移暁全も共よ奇くとて寶よ托宴の勝

跡あり

思川 稲荷のあより橋場の渡場へ行道を横まれるは入の小構をり治義

駒込川とも呼ぶる里民云傳ふ

四年庚子簾金倉將軍頼朝より此地を過ぎて河を渡りて船を泊ひし故ニ

按又東檜木院四年庚子十月廿七日佐竹君秀義追討の功より頼朝より進發あり同年十一月

四日常陸國府より着付されたり其後の年壬辰又小糸九代記より文治五年七月十九日要則
義衡追討の首途より頼朝陽日汚をりて船を載たまひて往古の奥州海道より

あもんか

圓國雜記

井川よりそりとよある

道真准后

偶因行渡

渡 橋場より須因堤の
ゆきと隅田川のほとり水の邊と云
のワカモト

古に渡りて今い橋場の渡と

え縁定板の江戸鹿すとし草紙よひの渡り今のかうとうをう川上りと不のあつき
喝くことを物語るうりとあそひつゝ源因の渡りとめいひあつてや夫本妙よ狂歌の縁あそ
ゆきよちうと

古今集　むこうの國とあらあきのまとみるかわすくのりくとくかのゆと
らひうせはえられへあらう　河のねうとくよちてゆくとくひしれへゆくとくもまう
あらうれとひりひつじてあらわをくよわ　さくとや舟よのれ日も暮れとひしれへ舟ふのと
ひらとそくようよく人物よひとて都よがのへゑくとくわくとさるかくよ向き身のとくと
あとあらた河のあらうよあそひけとすかよええぬをくすうれみみ人見あらとくわくす
思ふと何をとくと向られは思ふむ都鳥といひりととまとてくわく

名のやせぐらひをとくも都よりか思ひ人
吉妻の道の記 角田けぢくとよひて見ゆる今も船よ

のふとくへゆくすのくよくあく人
これそらのあつまうちをくらうすくらるの渡きけあ 長嘯

うてなぞれとまのむじすをなげしむる自
らの道よあきらめの觀音こそ幽やかにてりと

佛母乞乞云云

夕霧小湏

須田の
桔

卷之三
左平記云正平

余騎^{よき}て 武藏^{むさし}國^{のくに}へ 打^{うち}破^こる

敵を道より待て戰を
向ひて追と小弛集

小手榜夏（あきらひや）打て出新因足利の両勢二十萬騎入乱て大々戦ひ帝（めい）足利方（しらぎがた）もんきりそくれ
えんぢんまよ（えんぢんまよ）すよ（すよ）後（ご）兵（へい）士（しそう）敗走（ひしふし）毛義家（けいか）

の先陣急に賊を追ひて後陣をもつて來て其の後
自諸軍を率て大よ呼て云天下のあゆみ朝敵より
氣の無く又の難局有

此戰よりまろて尊氏の首をとむべしけの時をり期をくまへて只二引両の
大旗の引よびて小ま差原より石賓坂坂東道既より四十六里を走時り間

小追舟きみふねたゞ此時このときの軍ぐんの石濱いそなみを打渡うちわす虎口とらのくちを遁のて方ほう
隅すみ内うち川かわとあり猶よの軍ぐんの兵ひょう

士殘止先途をまち向日既に西の山よりて河の側懶も見え
りすれに義ある續てゆきもあらずと又後よりはく味方もうくれ年と

かねのわれと牙をかじて本陣へ引歸すとあり以上左平記

砂尾不動院

檜陽寺

と

渡

の

サ

ミ

シ

ミ

シ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

砂尾不動院

檜陽寺

と

渡

の

サ

ミ

シ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

砂尾不動院

檜陽寺

と

渡

の

サ

ミ

シ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

砂尾不動院

檜陽寺

と

渡

の

サ

ミ

シ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

砂尾不動院

檜陽寺

と

渡

の

サ

ミ

シ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

砂尾不動院

檜陽寺

と

渡

の

サ

ミ

シ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

砂尾不動院

檜陽寺

と

渡

の

サ

ミ

シ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

砂尾不動院

檜陽寺

と

渡

の

サ

ミ

シ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

ミ

砂尾不動院

檜陽寺

と

渡

お着相實有の草を拂ひ言下の一喝より異學狹解の塵を拂ひと云奉
の床の前より一千七百の則を重て以公傳公を仰く坐禪の食のりと云朝
暮四の助を得て文字言ひの詰頭を離らる

淺茅原 總泉寺 大門のあぐりをり

因國雜記

人めさへわれて拂ひたまうれ浦モアウムの面相をワレ

道奥准后

妙龜塚 みかめのぼくと稱ひ

古墳一基

みかめのぼくと稱ひ

卷之四十云く嘉祐二年六月廿二日改修定

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

鎌倉權左夫景道石塔
碑面向阿弥陀佛憲樂延久ニ庚戌年十月廿二日とありニ五輪の石塔
は所より碑面向阿弥陀佛憲樂延久ニ庚戌年十月廿二日とありニ五輪の石塔
鎌倉權左夫景道石塔
碑より法名を以て入殿率の年月を考へと是も又うへ後世子の一族の人
きの造立也。又らんを景道の嫡宇府將軍良兼四代の孫た間ノ尉致經のニ田村出小九郎忠通の子
其余嘗て歷代住僧の石塔までに奉事。昌泰正壽永康え文永弘安正安嘉え正和文無正慶文正等の年
号を刻。右頃づれも仰塔の中より存也。
それどりうる故づ近年散失してしまふと
嘗て天台宗の古跡として保え年間中與して保え寺と号へり。遙の後
ちよ荒廢ぢと明蓮社聰譽上人西仰和尚の時より天台宗を改めて淨家
小傳を其時トテ文字の法漏あるにめ寺院再興ありと云。而して吉本命
を藏。今終はてあくまでも文を保え寺より作る。又境内に弥陀身至觀音一光三界的像を刻。而より御具
色林昂の文字をらすをも裏より庚午二年武列保えますとある。右頃あり證とぞ也。
えいえんりきうちや
深榮山長昌寺 法源寺の南より隣る嘗てまり御府内日蓮宗の古跡として延山

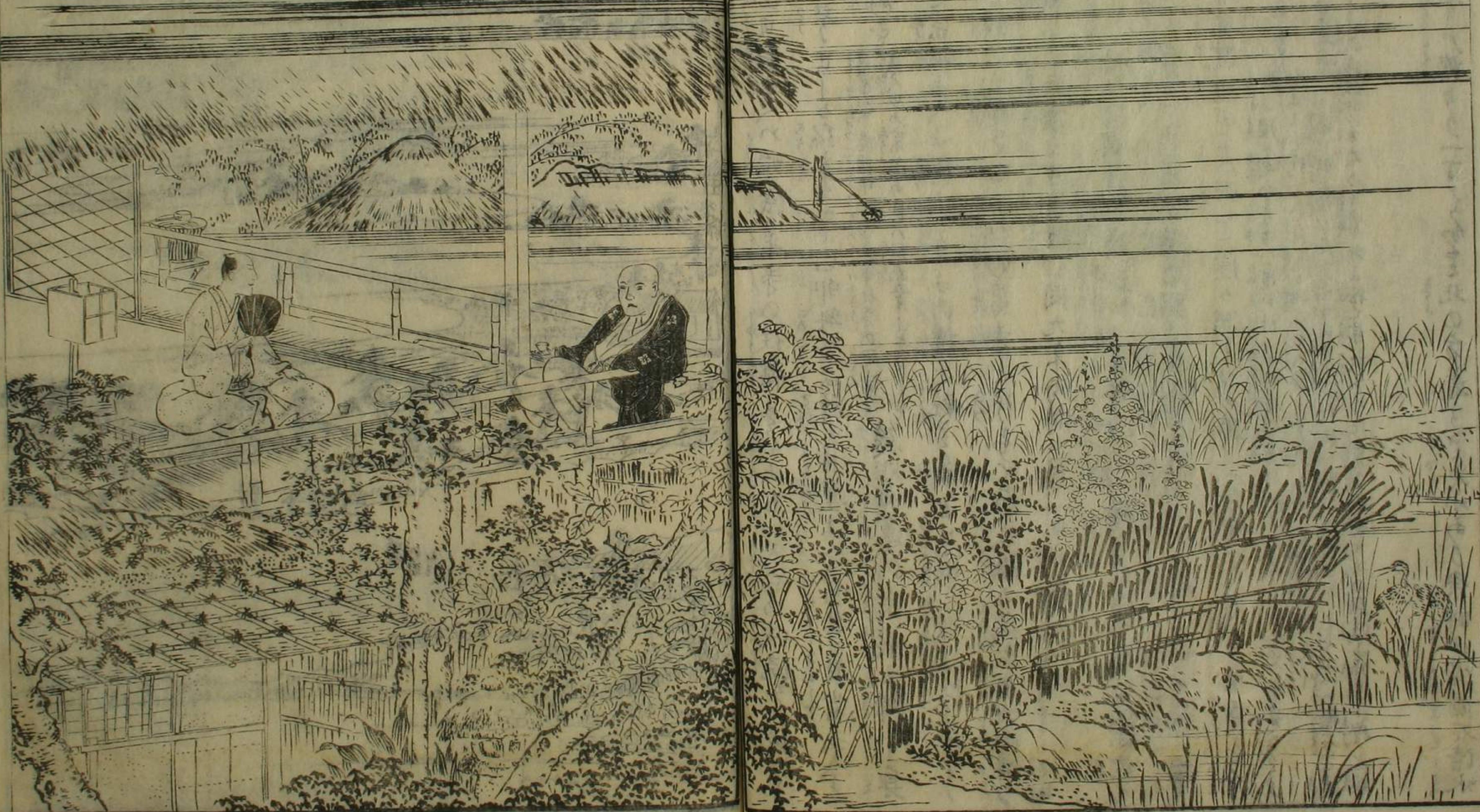
小属なりて毘山日寂上人へ始淺草寺の住職より上古の天台の法流を汲み
寂海法印と号せらる弘安二年己卯歿所よ旅て日蓮上人の弟子日常上人と
宗義を討論と或ひ宗論ありハ弘安五年壬午とぞ孫小日蓮の宗風よ歸り身
延山よ登りて宗祖上人よ謁り弟子の禮を執る名を日寂と改後浅草ノ
帰る金龍を辞して庵をレヒヒ妙高寺と号すてら隠る後ふ所の西僧も
又ともか受戒して日増可と改む同九年丙戌十月一日日寂上人帰寂と上の
墳墓境内より中をより依て其後日増と申す
送る者とぞりきり内房精舍と精場の心ふ建て
長昌寺と号く當寺新鑄の鐘の銘よ其心え闇内灯よ接と偶水難よ羅
堂塔漂流鐘示沈没と共に所を憚り洲とひの強よ元亨元年辛酉寺を今
の地又移とあるをあくと猪口卷自鐘う御の余不よほひひひひひひひひひひ
宗論芝竹ひく寂海法印第本の日常師よ船と宗教を叫え竟よ日蓮大士の弘法よ歸り證と承
せよ示さんぢやよ

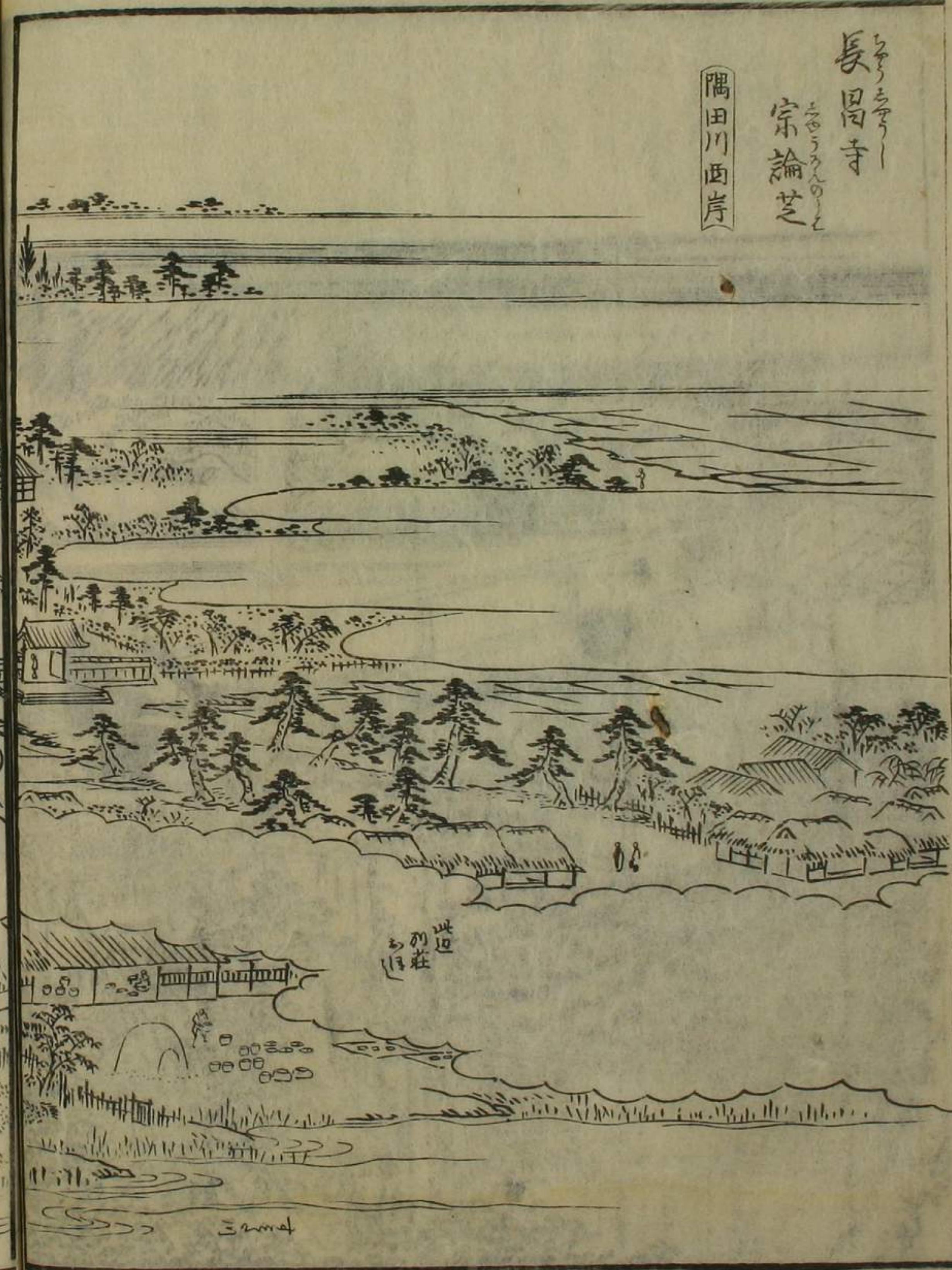
いひる
水鶴ハ橋塲の
わたり乃ひ佃嶋
うきやう
を佳境とせり

源氏物語みも

あくまつま秋の
もみじとち
花紅葉のさうり

あるとくわら
とこもつとある
あけれるあけとも
あまめかぬよ
あひみのうちだら
たるわらわと
さくとあわれよ
おなせどん
あるとく
そへし





長岡寺

宗論芝

隅田川西岸

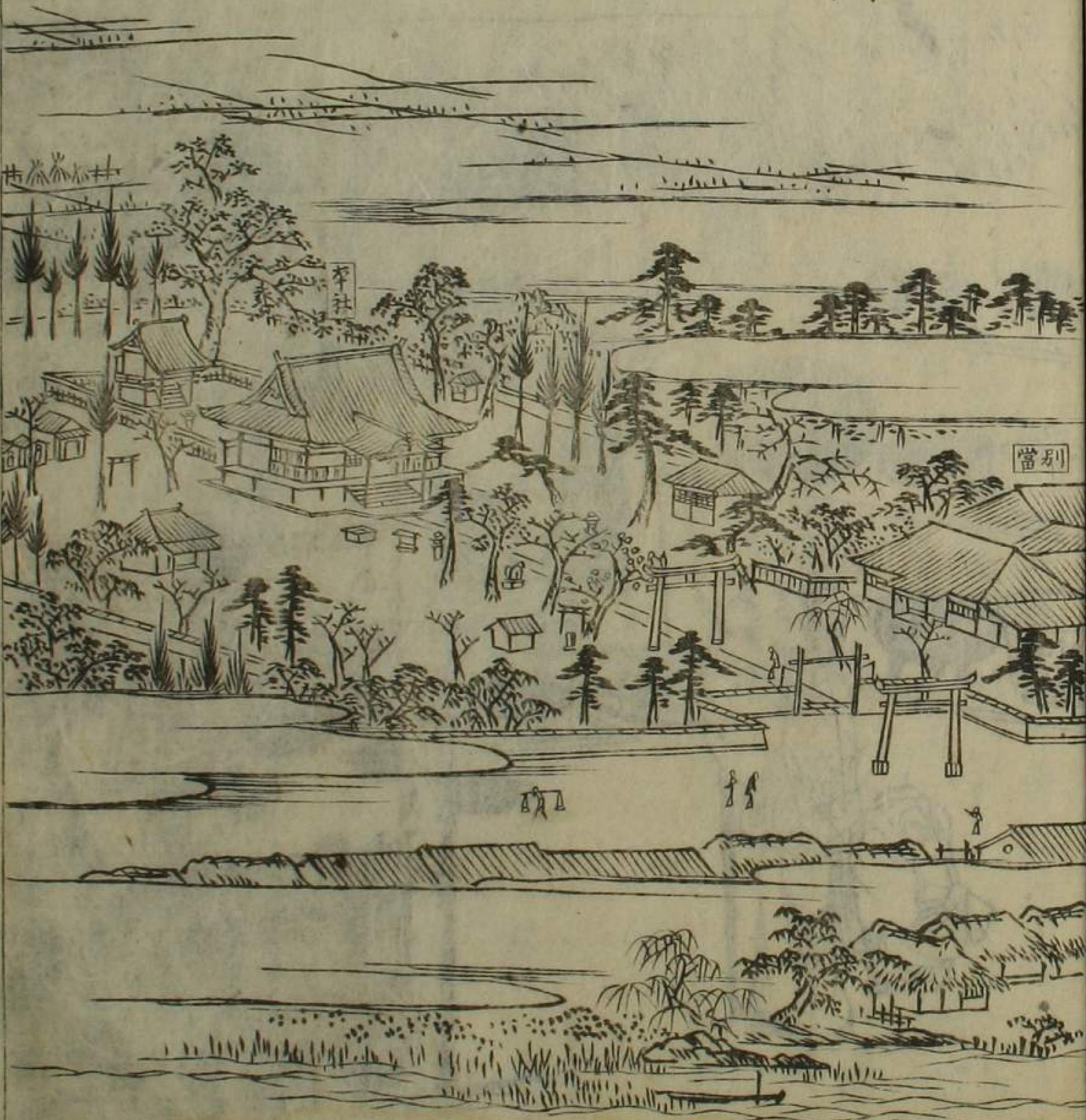
小内別當の天台宗とて松林院と号を祭禮の毎年八月十五日

放生會を施行せり

社記曰源頼義朝臣義家と其子勅を奉へて奥別安倍貞任宗任を謀戮
一作仍康平六年癸卯八月其祈願とて鎌倉由比郷をとし壯今戸の
地より至て石清水八幡宮を勧請あり 今戸社記云今津は作る小原北条家の分限帳不
按由津戸へ通音うれ 其後奥州武衡宗衡兄弟叛逆の時も義家朝臣鎌倉鶴
岡をとひ當社八幡宮等より祈願あひて賊徒を亡へ勝利あり故永保元年
辛酉両社の修造を加へられ行基彌造の弥陀を収らる本尊佛と又同作の
薬師をとひ慈覺の作の觀音等の像をも安坐ありとく其後文治五年
右大將頼朝公奥別の泰衡追討とて進發の時も御神と祈誓ありて勝利
を得てひ建久元年庚戌下河辺庄同行平を奉行とて宮社を重建あり其
小寛永十二年丙子 台命を奉へ舟越伊豫守八木但馬守等是役司
アリ當社御再興ありとて降神光日く小新より靈威月くよ盛り

今戸
八幡宮

閑田川西岸



今戸焼

此邊甄者
陶器通ありて
是を産業
とぞれ就く
よみ今戸燒
と称せ

元禄二年七月
音鶴田町
行

土をこす色
はうすにて
ほりれい
そのやまの
露べ
いともひ
や毛

松風



靈龜山慶養寺

向く南の方今戸橋の北の結より曹洞派の禪刹

宝山を明山良察和尚といふ

黄門元鳥越西福寺の隣小豆後卒不ようす

總門の額靈龜山

の三家の頤齋の筆れを辨財天社境内より本尊弘法大師唐よう携本の

靈像うつしゆき

黄門元鳥越西福寺の隣小豆後卒不ようす

總門の額靈龜山

真土山 今戸橋の南の結よりまた待乳作と或信土作

万葉集小示打

とこと多くて多うの文はまればうと云々

万葉集

亦打山暮越行而廬前乃角太河原爾獨可毛將宿

弁基

今宵また誰畜めらん庵崎の隅田川系の秋の月ゆゑ

須徳院

月影のさとや庵崎すゑて竹紙とまくらや山のかひよし

家隆

新千載秋風抄 あはら山々越行の風寒えすにけりあはるふ鳥外くう

定實

あはら山々越行の風寒えすにけりあはるふ鳥外くう

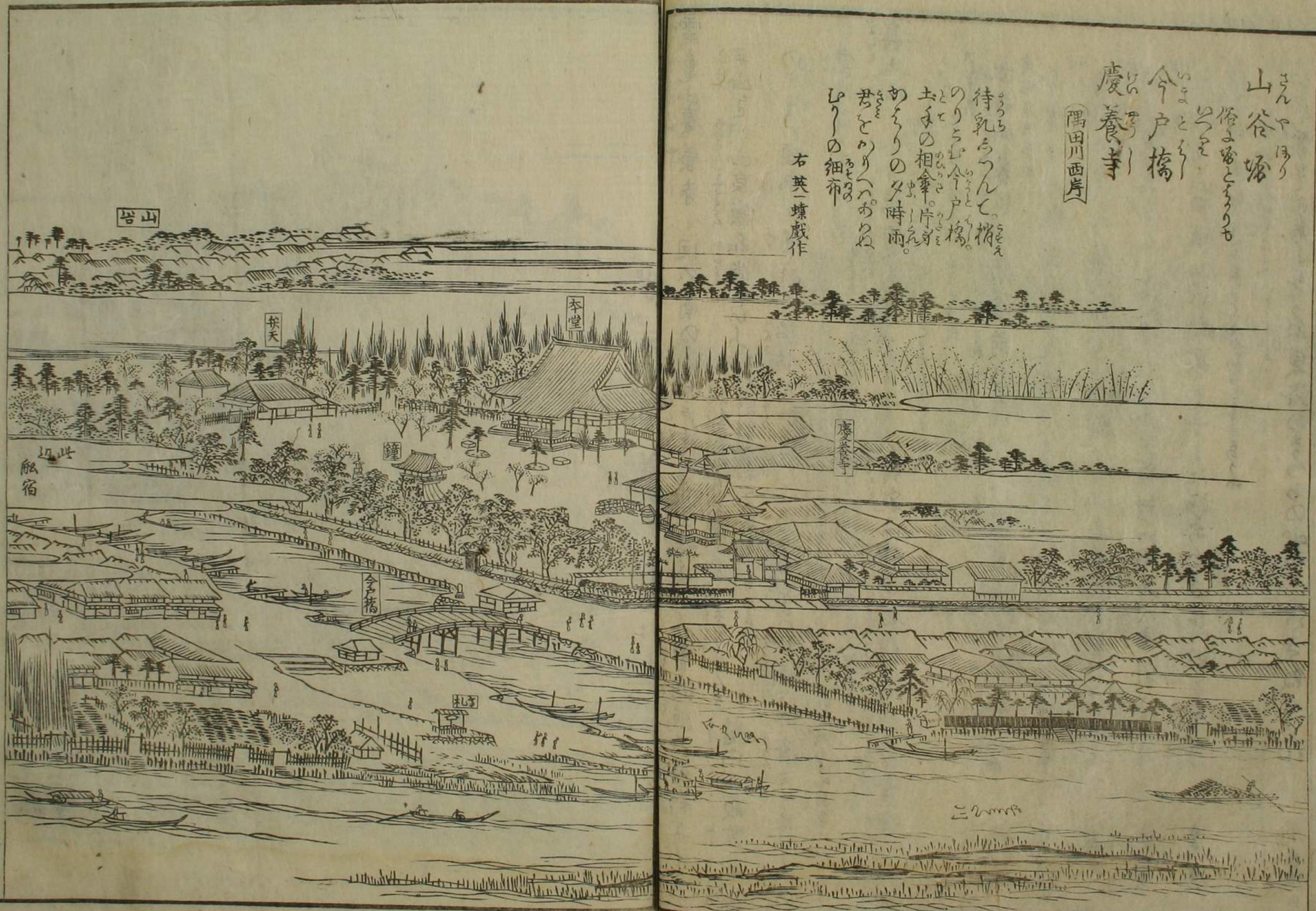
季廣

回國雜記 道もくろ名ふくも多かとすりあふ

まうちゆとりあるて

のを承そひのりむきくぬ東路のまうちの山ふづひまくらん

道典准后



山谷宿
俗よろこびりち
今戸橋

慶養寺

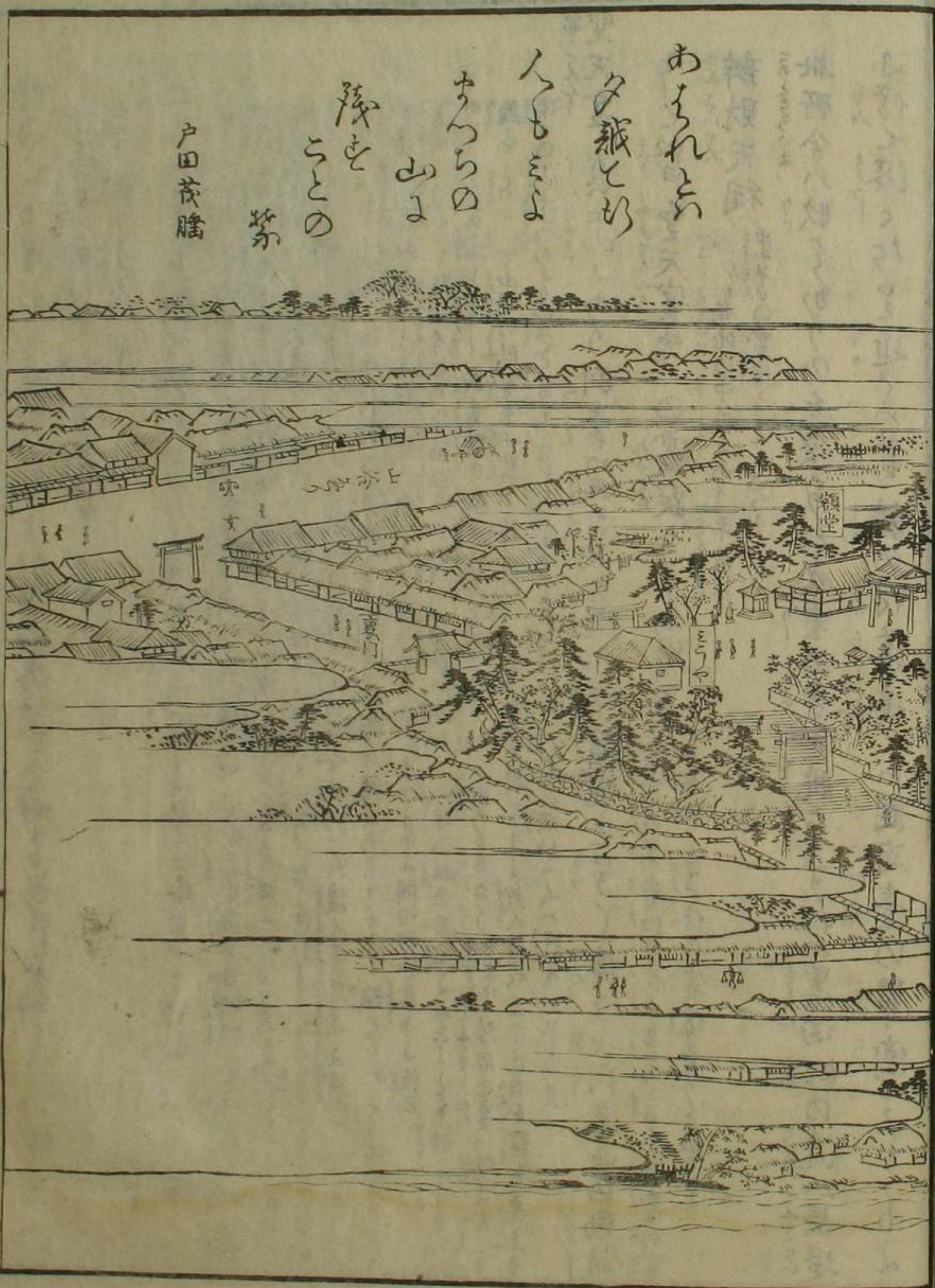
隅田川西岸

待乳らんて、梢え
のりくじ今戸橋。
とての相金輪。片
あらうの夕時雨。
君とひりへ。わくね
しりの細市

右英一蝶戲作

真土山
聖天宮

隅田川西岸



時よりともほり小みちぬまうち山落葉を時とこめしもゆ

二八

戸田恭光入道 茂曉空天の宮のかくらよ
碑を建たり其碑面よ

あらわしの夕、鐵て行人もえよまくらの山のとことらとのそ

六甲

家祖の名不詳角抄等より大和紀年の國境とある豪傑草より武義國に入たるを或書く云く大和ノ
信土山角内川より廬崎又發河より隅田川庵崎とも云ひて全くそくられると云ふれど此は土山庵崎と云ふ事也按よ西山の釋万葉集より此書へ勅撰の體であらうと云ふれ
キ法師の私かもすまられて後方圓へ入る人を狩つて隅田河の条ありと註と
菊岡吉原云く往古平木の邊海面より頃に當山を仲ト入律の舟の目當あめよもありと云ふ
事と山の名と云ふ新鳥城の山を山谷といひも皆山又圓ある者あり山谷今へア本ノラスを
論考する所で山川の形勢も千載を経ればまづねむと云ふ事と或人の説によりの日本傳を爲あま
頃の山の名の考と穿ちを築立りと云ひ得べれらの岡よりへり狩高カレシタクヘ
奉天宮 真山より別當の天台宗金龍山卒龍院と号く傳云大同年中の勅請
えとくそくえんく
れいせん
和漢三才圖會の書より解説列當

實鹽源く予信の靈像ありといふ
山の林鹿山の中鷦々す平政子
辨財天祠
まほのえん
まほのえん

あれどもつづきま
壯所今ハ秋もあリの丘陵をと東の方を眺望すれハ墨田河もの流れ長堤き

いぢりの風色を幽遊あり

六年庚申の歲

吉原遊女町　曰卒堤の下よりあま俗よ五丁町と唱へ
長の慶長の頃江府内よ僧繁榮の地とすりあひの是を傳く肉駿列え吉原の驛

遊女屋を始めてする葦二十余人江戸又移住を其頃へ定むる花街もれぐ
うきよや ひしゆ ともやう えと うきあら まのこう まくしま
うきよや まんま るもくまきす くろり
うきよや まくしま まくしま ひじゑどり

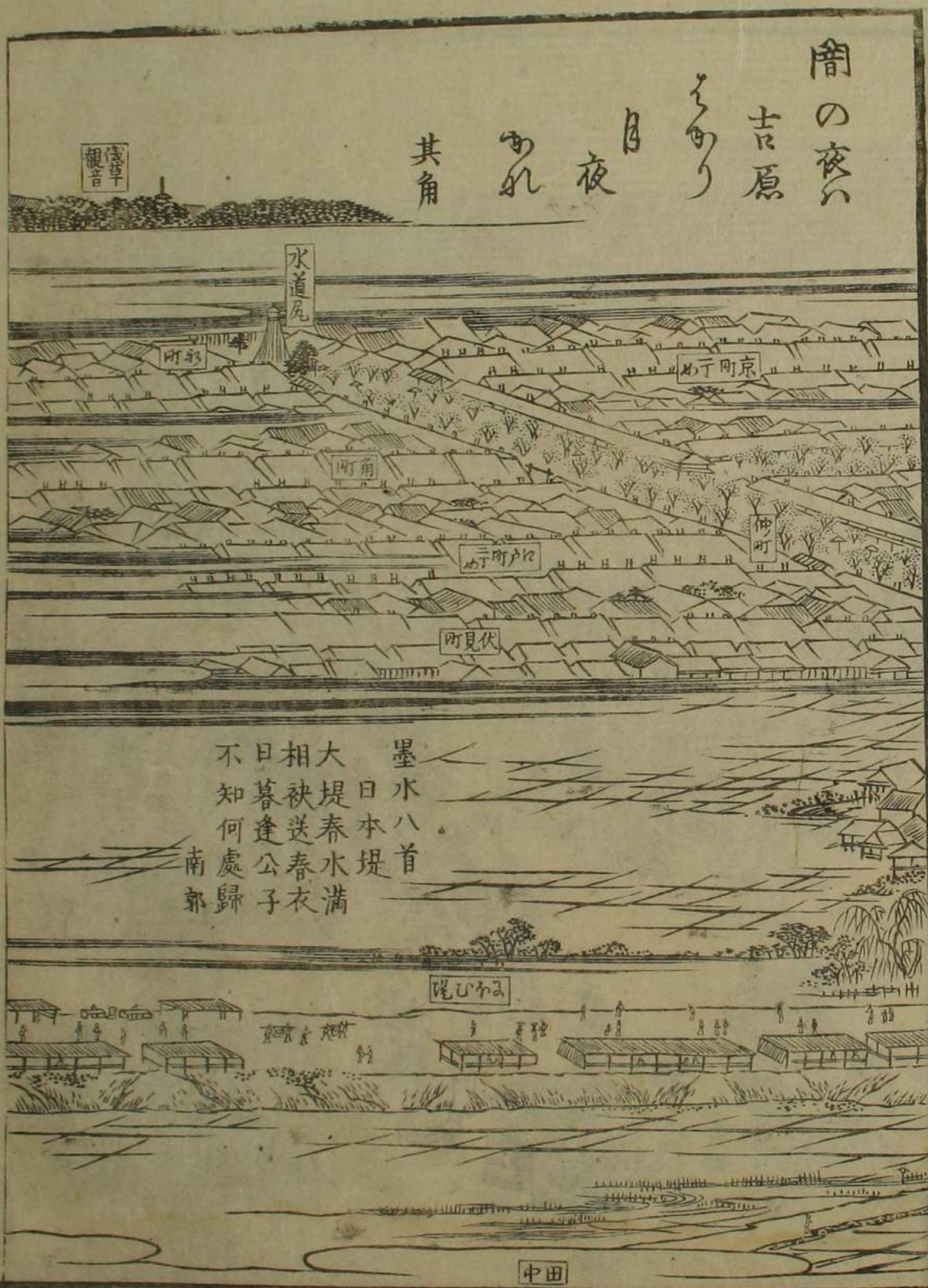
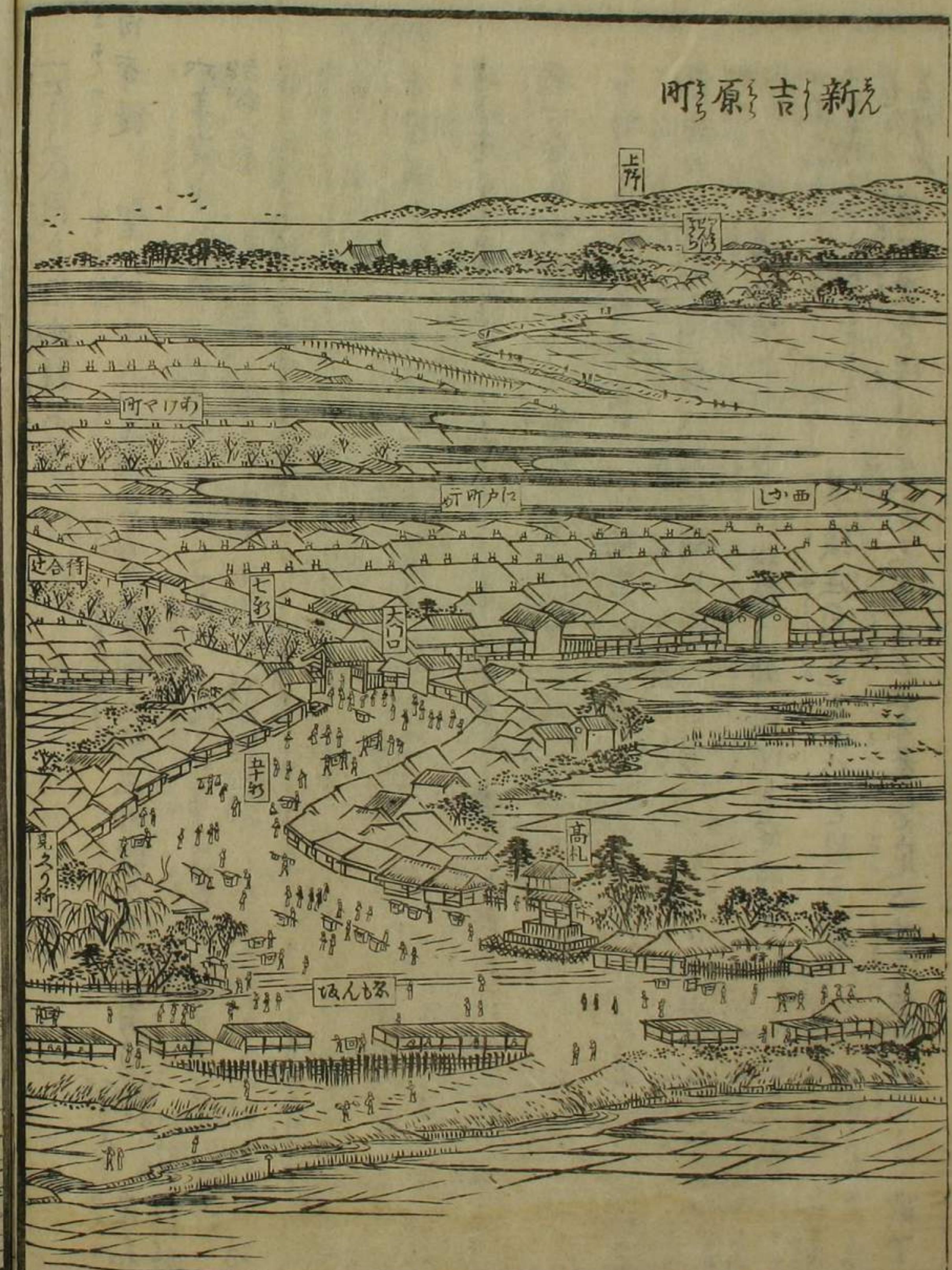
今がこよね女屋散在アラウル彼輩官よ訴へと京橋貝塚町の東泥沼の地を
築理め一方又アヒト櫻け南の側を角町と唱へ
今の高橋まゝく
そまきまん
今
の
京
橋
炭町是也 北の側を柳町とりか京橋

柳町 又中の通を仲の町と号け南北より傾城町を完發と
今京橋具足町と柳町との間
南北への通を中通といふも
相別小内糸の産すて始其内

以上事跡合考す載るところより
其後庄司甚た用へと云ふ二段
ひづるよ え
ひづる 官の免を得てえ和ニ年始て荒巻を定め草屋町のあよて貳丁
ひづる

新吉原町

上井



新仲八
吉原の
のまつり



四方の地を賜ひ是れ成吉原町と号く。今所謂和泉町高砂所住は明難波所等其間水引
あまとい開け故に霞原ともいへてを賛へて吉原より作と云ふ事跡合考さうひあらう
え様定極の江戸鹿ますの書より其始發例え吉原よりうそ故よこの事ありと云ふ。蟹井善
落成を爲よ江府益般系昌一人執事暮室をあれ以附膺二年の冬竟よ今之
所すて脇地を賜ひ附膺三年丁酉依て新吉原町と号るゝと批花柳のまこと
えんと
小三都の魁なり其賑い特殊生の花の頃をりて傍たゞく春宵一刻の價
せんまん
千金を顧ど初秋の燈籠の万字屋の玉菊を追稿よりまことに八朔の向重の
巴屋の高榜より起る今も物目をりて更衣の節とも名す一掛ハ二度の月えの
全盛ひのむよさらうを悉く其美を擧ふりとまわくとよからく妙处了
えん
星を界すと

江戸名所圖會開陽之卷終

